

# 平成24年度 鹿児島大学 FD報告書



鹿児島大学FD委員会  
KAGOSHIMA UNIVERSITY Faculty Development

# CONTENTS



## I. 平成24年度FD報告書作成にあたって

- FD委員会委員長(教育担当理事) …… 2

## II. 鹿児島大学のFD活動 …… 5

### 第1部 全学的取組み

- 新任教員FD研修会報告 …… 6
- FD・SD合同フォーラム …… 8
- 学生・教職員ワークショップ  
「学生の自主的な学習を生み出す大学へ」 …… 13
- 鹿大版FDガイド第4号、第5号の発刊にあたって …… 22
- 共通教育における学習実態・学習成果に関する調査 …… 23
- 教育・学生支援担当教職員講習会  
(新入生オリエンテーション説明者講習会)の報告 …… 28
- 教育センター高等教育研究開発部(共通教育)のFD活動 …… 30

### 第2部 各学部・研究科のFD活動報告

- 法学部、人文社会科学研究科
- 教育学部、教育学研究科
- 理学部
- 医学部
- 歯学部
- 工学部
- 農学部、農学研究科
- 水産学部、水産学研究科
- 共同獣医学部
- 理工学研究科
- 医歯学総合研究科
- 保健学研究科
- 司法政策研究科
- 臨床心理学研究科
- 連合農学研究科

# I

## 平成24年度 FD報告書作成にあたって

鹿児島大学FD委員会委員長(教育担当理事)  
清原 貞夫

本報告書は「教育センター年報」から独立して3年目の報告となりました。鹿児島大学のFD活動は、各学部の教育研究職員、教育センターの先生方、職員の方々の協力の下、年間に実施する事項なども定着し、それぞれの目的に向かって企画実施されてきました。

FD委員会のミッションは、本学が掲げる教育理念・目標を達成すべく、教員個々の教授法の開発と授業力アップ、そして学生支援が中心です。昨今さらに、カリキュラム・プログラムの開発、教育環境および教育制度の開発などへの提言も求められてきています。平成22年度以降のFD委員会の活動の詳細は本学ホームページの鹿児島大学のFD活動をご覧ください。平成24年度は、前年度と同様に4つのワーキンググループ「FDフォーラム、FDガイド」「FD研修会・講習会」「実態調査」「学生・教職員ワークショップ」を設け、すべての委員が必ずどれかに属して、企画・運営に携わっていただいています。

継続的な取り組みとして、新任教員FD研修会、FD・SD合同フォーラム、鹿児島大学共通教育における学習実態・学習成果に関する調査、そして学生・教職員合同ワークショップ『学生の自主的な学習を生み出す大学へ』が行われ、FDガイド第4号、第5号も発刊されました。継続は力であり各事業少しずつ改善が加えられ、向上している様子が見てとれます。特に注目される取り組みとして、平成23年度に設置されたピア・サポート(鹿ナビ)制度を平成24年4月にスタートさせたことです。各学部から集まったサポーター(上級生)が、共通教育棟2号館1階のピア・サポートルームで下級生の学生生活及び修学上の支援のためのアドバイスをし、学生目線でのホットな会話が交わされました。

FD活動は、教職員個々人の向上意識と自発的な取り組みが不可欠であります。教育を改善する活動には多大な時間と労力がかかると思います。そして想像力と創造力が必要でもあります。授業力アップには各教員の最も大切にしている価値や活動に根ざすことが肝要であり、その中心的「核」となるものは、各教員の研究領域・活動であると思います。したがってFDでは、研究活動と教育は密接に関与することを自覚し、職務遂行力の向上とキャリア形成を念頭に、教職員の全員が一步一步、粘り強く、研究・教育活動を推進していただきたいと思います。

### 平成24年度 FD活動一覧

6月	共通教育前期授業公開・授業参観(6/18~6/29)
9月	新任教員FD研修会(9/24)
10月	共通教育後期授業公開・授業参観(10/29~11/9)
11月	FD・SD合同フォーラム(大学地域コンソーシアム鹿児島FD・SD活動事業部会と共催)(11/10) 教育センターオープンクラス(11/20~11/26)
12月	学生・教職員ワークショップ(12/18)
1月	共通教育における学習実態・学習成果に関する調査2012 鹿大版FDガイド第4号の作成
3月	教育・学生支援担当教職員講習会(新入生オリエンテーション説明者講習会)(3/26) 鹿大版FDガイド 第5号の作成 鹿大FD報告書の作成

### 平成24年度FD委員会委員

所属	氏名	所属ワーキンググループ
理事(教育担当)	阿部 美紀子	
教育センター長	門 久義	FD研修会・講習会
教育センター副センター長	中島 あや子	FDフォーラム・FDガイド
教育センター高等教育研究開発部長	西 隆一郎	実態調査
教育センター高等教育研究開発部	伊藤 奈賀子	FD研修会・講習会、FDフォーラム
法文学部	柿内 一樹	学生・教職員ワークショップ
教育学部	松井 智彰	FD研修会・講習会
理学部	山本 啓司	FDフォーラム・FDガイド
医学部	深野 佳和	実態調査
歯学部	田口 則宏	FDフォーラム・FDガイド
工学部	内山 博之	学生・教職員ワークショップ
農学部	境 雅夫	FD研修会・講習会
水産学部	小谷 知也	学生・教職員ワークショップ
共同獣医学部	松尾 智英	FDフォーラム・FDガイド
理工学研究科	仲谷 英夫	実態調査
医歯学総合研究科	田川 まさみ	学生・教職員ワークショップ
司法政策研究科	小栗 實	実態調査
臨床心理学研究科	金坂 弥起	FDフォーラム・FDガイド
教育センター外国語教育推進部長	富岡 龍明	FD研修会・講習会
(オブザーバー) 教育センター高等教育研究開発部	洪井 進	学生・教職員ワークショップ

II  
鹿児島大学  
の  
FD活動

第1部  
全学的取組み

# 新任教員FD研修会報告

## 1. 概要

**日時** ▶ 平成24年9月24日(月) 13:00-16:30

**場所** ▶ 郡元キャンパス 稲盛アカデミー棟1階A11教室

**参加者** ▶ 20名

**対象** ▶ 平成23年7月2日～平成24年7月1日採用の新任教員

**目標** ▶ ●教育目標やカリキュラム内での位置付けに基づく授業設計のポイントを理解する。  
●教育者としての役割に対する意識を高める。

## 2. 研修会の趣旨

FDとしての教育改善の第一歩は学部学科として教育目標や目的を明確にし、それをファカルティで共有することである。それに即してカリキュラムが構築され、その構成要素としての科目が配置される。各科目にはカリキュラム内での役割があり、それを踏まえない授業改善は実質的なFDにはつながらない。今回の研修会では授業改善ありきのFD観から脱却し、FD観を転換する機会と位置付けられる。

## 3. 当日のプログラム

13:00-13:10	趣旨説明
13:10-13:40	小講演「教育目標達成を目指した授業設計 ―カリキュラムの一部としての授業を意識する―」
13:40-14:40	活動①:教育目標を踏まえた授業の設計 大学及び共通教育の教育目標を踏まえ、各自、シラバスを作成する
14:40-15:00	休憩
15:00-15:45	活動②:授業設計の多様な観点を知る グループごとに各自作成したシラバスについて説明し合い、それぞれの考え方を踏まえてグループとして一案を作成する
15:45-16:20	全体発表
16:20-16:30	全体のまとめ

## 4. 研修会のまとめ

当日は、長時間であったものの参加者の積極的な参加が得られ、十分な成果が挙げられた。グループによって、取り組み方には様々な違いが見られたものの、教育目標を意識したシラバス作成を実際に経験することで、今後のシラバス作成だけでなく、各々の所属する部局のカリキュラムに対する意識の向上が図られたのではないだろうか。

また、シラバスを作成する科目の教育目標との関係やカリキュラム内での位置付けについて教員間で話し合う過程は、各部局において体系的なカリキュラムを構築する際には不可欠である。各自がカリキュラムを意識し、その課題の解決を目指すことが日常的な営みとなることが、実質的なFDにつながるといえる。

参加者からも指摘があったが、教育目標を踏まえた授業設計のためには、組織としての教育目標や方針があらかじめ明確にされている必要がある。本学はいわゆる3つのポリシーの策定もまだ完全ではなく、大学全体にも各部局にも早急な取り組みが求められる。

また、今回共通教育科目を作業の題材として取り上げたが、体系的なカリキュラム構築という観点から考えた場合、各学部学科の教育目標達成までの過程に共通教育科目をどのように位置付けるかも大きな課題である。共通教育科目は全ての学生が必ず受講し、卒業までに取得しなければならない単位数も少なくないが、その意味や意義が充分理解されているとはいいいがたい。教員も学生も共に理解したうえで意欲的に教育・学修活動に取り組むためにも、共通教育科目に期待する役割について各学部学科が明確にしていくことも必要である。

(文責 教育センター 伊藤 奈賀子)

# FD・SD合同フォーラム

## 1. 概要

**テーマ** 「FDの目的再考 - 実質的なFDとは何か -」

**日時** 平成24年11月10日(土) 13:00~16:00

**場所** 郡元キャンパス 共通教育棟3号館2階321号教室

**参加者** 57名(参加校: 鹿兒島純心女子大学、鹿兒島純心女子短期大学、志學館大学、第一工業大学、鹿兒島県立短期大学、鹿兒島工業高等専門学校、鹿兒島大学)

**主催** 大学地域コンソーシアム鹿兒島、鹿兒島大学FD委員会

県内各高等教育機関におけるFDの現状について情報を共有し、それぞれの立場から「何のために/どのようなFDを行うのか」を今一度考え直すことを目的として、上記のフォーラムが開催された。鹿兒島大学の阿部理事(鹿兒島大学FD委員会委員長)による開会挨拶に続いて、趣旨説明と問題提起、そして3件の事例報告が行われ、休憩を挟んでパネルディスカッションが行われた。以下にその概要を記述する。報告者・発言者への敬称は省略する。

## 2. 趣旨説明と問題提起: 「FD を巡る全国的動向と鹿兒島県内の現状」(要旨)

報告者: 伊藤 奈賀子(鹿兒島大学教育センター准教授)

大学においてFDはあたりまえになりつつあるが、「なぜやらなければならないのか。何のためにやるのか。」ということが一般の教員に広く理解されているとは言えない状況がある。FDについての教員の解釈は「授業改善」に限定される傾向がある。授業やカリキュラムの改善は教員側から見たFDの一面でしかない。学生側から見たときの種々の「改善」の成果が問われるようになってきている。

県内の現状をみると、FDに関わる事業としてはシラバスの整備、授業公開・授業参観、学生による授業評価(アンケート)が全ての高等教育機関で実施されている。ほとんどの機関で継続的に取り組まれている履修カリキュラムの改定やシラバスの改善もFDに含まれる。これらの既に行われている事業においては、ただ継続するだけではなく、それによって「学生の学修行動がどのように変わると期待できるか。」を念頭に置くようにしなければならない。

以上のことを踏まえて、これまでに「行ってきた」、そして現在「行っている」FD活動が学生の学修行動を変えたかどうかを検証する必要がある。その上で今後のFDについて検討すべきである。

## 3. 事例報告(1): 「鹿兒島県立短期大学における学生授業評価について」(要旨)

報告者: 朝日 吉太郎(鹿兒島県立短期大学商経学科教授)

先進大学の例ではなくて、県内の各大学で行われている実例を出し合うという趣旨に則って、試行錯誤している現状を報告する。県立短大商経学科では1995年から授業アンケートを実施し、結果をインターネット上で制限なしに公開してきた。無制限の公開は当時としては他に例がなかった。アンケートを取ることと結果の全面公開については多くの懸念や否定的反応が存在したが、「学生の評価を安易に授業そのものの質と見做すことはしない。教員同士の比較競争の材料



にしない。教員の教育業績評価に結びつけない。」というような配慮をすることによって困難を克服してきた。

3学科7専攻で統一した形式の授業アンケートを導入しようとした際に先行していた商経学科の方式には強い拒絶反応があった。「アンケート結果は当該授業担当教員のみへ通知」する方式から始め、公開する範囲を段階的に広げてきた。全学への配布に至るまでに10年かかった。今後はアンケートの実質化が課題である。2012年度後期から「中間アンケート」を実施し、当該学期内にアンケートに基づく授業改善を行うことを試みている。

## (2): 「医学科におけるアウトカム基盤型教育実現への取り組み」(要旨)

報告者: 田川 まさみ(鹿兒島大学大学院医歯学総合研究科教授)

「アウトカム基盤型教育」とは学習成果として期待される能力を到達すべき目標とし、達成のための教育を実施し、到達目標に照らして学習効果を評価する形式の教育システムである。医学部医学科ではアウトカム基盤型教育を導入して3年目を迎えている。導入にあたって、新カリキュラムを構築し円滑に実施していくために、講習を含むワークショップを開催して教員の意識向上を図ってきた。

当学科では入学から卒業までをPhase 1(医学・医療の基盤)、Phase 2(総合的学習)、Phase 3(臨床実習)に区分し、Phase2終了時とPhase3終了時にそれぞれ2種類の全国規模の資格試験を受験する。これらをとおして学生に医師となるために必要な資質(基本的臨床能力、医学知識、倫理観と社会的役割の認識、科学的思考能力)を習得してもらうことが到達目標である。入口側の改善として、アドミッションポリシーを整理し、それに基づいて入学者選抜方法を改定した。現時点で受験生数は増加傾向にある。

授業評価については、医学科は学期制ではなくて2、3週間で一つの授業が完了し、すぐに次の授業が始まる。授業アンケートは逐次行う必要がある。アンケートの結果を教員にフィードバックすることにより、徐々にではあるが評価が高くなってきている。

医学系のカリキュラムには全国的に臨床実習の改善が求められおり、そのために次のような取り組みを行っている。

### ●PBLチュートリアル学習(problem-based learning 問題基盤型学習)

以前から少人数による問題基盤型学習を行ってきたが、グループ学習を指導できるチューターの人数を増やし、技能を向上させる必要があった。チューター養成講習会を5回開催し、のべ85人が受講した。

### ●シャドウイング(医療現場の見学)

学生の臨床経験を増やしたくても学内では手一杯の状況である。そこで、学外の医療機関の協力を得て、医療が行われている現場で学生が施術者のそばに寄り添って見学する形式の授業を導入した。

### ●臨床実習の指導者養成講習

臨床実習を改善するには、指導者の意識・技能を向上させる必要があり、そのための講習会や説明会を複数回実施した。

### (3):「森林科学コースにおけるカリキュラム改善の取り組み」(要旨)

報告者: 畑 邦彦 (鹿児島大学農学部准教授)

最近10年間のカリキュラム改善作業の端緒となったのは、「2003年にJABEEの試行審査を受ける。」と決めたことであった。JABEE審査は「教育カリキュラムが教育目標を達成するためのものになっているか。」という観点から行われるので、FDと大いに関係がある。審査に必要な資料を揃えるための準備作業を1年以上前から始め、さらに当時の助教授全員がJABEE研修会を受講した。この過程で教員側の意識が変わり、授業改善、カリキュラム改革に組織的に取り組めるようになった。

JABEE審査対策に取り組むなかで当時の1学科2コースのコース統合案が浮上した。コース統合に伴って卒論発表会を口頭からポスターに変更した。発表者数が倍増することに伴うやむを得ない変更であったが、結果的に卒論の内容について実質的議論が行えるようになって改善につながった。さらに、全講義の内容についての検討会を全教員で行ったことにより、教員がカリキュラム全体の中で自分の担当授業の位置づけをあまり明確に認識していないことが明らかになった。このことは、カリキュラム改革は全員参加体制で行う必要があることを示している。新カリキュラムについての「進路別の履修モデル」を作成したが、これは学生にはあまり活用されなかった。

カリキュラム改革を進めるためには、個々の教員の授業内容は尊重しつつも互いに意見を言い合える雰囲気があることが重要である。

## 4. パネルディスカッション及びまとめ

コーディネーター: 大学地域コンソーシアム鹿児島FD・SD活動事業部会長

近藤 諭 (志学館大学法学部教授)

パネリスト: 伊藤 奈賀子 (鹿児島大学教育センター准教授)

朝日 吉太郎 (鹿児島県立短期大学商経学科教授)

田川 まさみ (鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授)

畑 邦彦 (鹿児島大学農学部准教授)



ディスカッションに先立ち、コーディネーターから「質的転換答申とFD」について解説が行われた。

「大学改革実行プラン」とはグローバル化・少子高齢化・成熟社会における知識基盤社会を支える人材育成を背景とした

1. 激しく変化する社会における大学の機能の再構築

2. 大学のガバナンスの充実・強化

であり、その人材育成の方法として、主体的学修を促す方法(双方向授業・教室外学習)や学修時間確保(1単位=45時間・予習復習時間確保の徹底)が挙げられた。さらに、質的転換に向けての課題として「プログラムとしての学士課程教育への転換」「学修支援環境の整備」「高大接続」「社会と大学の接続の改善」が示され、特に前二者がFDとの関連が予想されるものとして、またこれら教育改革を遂行するためのFDの支援的役割として「研修を通じての意識の共有」「カリキュラム開発」「学修時間の増加・確保策の検討」が指摘された。

今後のFDの方向性として、組織レベルで実施される個々の教員の教育力開発につながる授業アンケートや授業参観・検討会、各種研修が例示され、加えて「教育改革の手段としてのFD」「大学「教育」そのものの再考」「自らの経験を越えることをいとわない覚悟」なども示された。3点目の自らの経験を越えることをいとわない覚悟が必要(めんどくさいことでもやらざるをえない)なことについて、ではどうすればよいか?

「教授」しない/教えることを控える

教室の主役を学生に明け渡す

正解のない問いを恐れない

予習/復習素材を自分で見つけ出させる(計画的な手抜き?)

などが挙げられた。

その後、冒頭の趣旨説明及び問題提起を行った伊藤先生と事例報告を行った3名の先生方をパネリストにして行われたディスカッションの質疑応答を以下に要約する。

まず、事例報告でなされた農学部森林科学コースの取り組みについて、阿部理事から「学科全体で行われている取り組みなのかどうか」という確認の質疑がなされ、畑先生から「独立していた2講座が森林科学コースという一つのコースを構成して行っているものであり、学科全体ではない。」との回答がなされた。

次に、フロアから「教員の問題であるのかももっと広範囲の問題であるなど、事例報告の中で様々な見解が聞かれたが、そもそも『FD』のテリトリーとはどういう範囲なのか?」という質疑が出された。これに対し、

近藤: 何かを伝えたいという教員の行動全てという意味で「何でもあり」だと考える。

伊藤: 議論をしながらそれぞれの組織・シチュエーションで合意を形成していくべきもので形は一つではない。

朝日: 教員個人の我流ではない教員の教育力育成であると考えます。

田川: 組織の教育理念等に関する意思決定まではFDの範疇ではなく、大学のFDとは組織が何をしたいのかははっきりとさせた上で、それに沿って教育を行っていくもの。

畑: どういう人材を社会に送り出していくかという目的に沿って、組織として行う教育活動。

と、ここでも様々な見解が示された。

次に、近藤先生から「学修時間の確保という問題は、特に文系では頭の痛い問題であるが、どうやって確保させていくのか。」という問題が提起された。これは特に講義外の学生による自主的な学修時間を確保するにはどうするか、という意味合いが強いものであった。それに対し、

畑: JABEEではコンタクトタイム、つまり教員との学修時間を対象としており、予習・復習は問題としていない。あとは、卒論研究などによって評価することになる。

田川: 医学教育は特殊な例になるとの前提のもと、自主学習を促すには時間割を詰め込みすぎないなどの対策が考えられるが、現実的には予習復習の状況は把握していない。また、医学部にはモジュールやユニットといった、コマ数にとられないカリキュラムもある。

朝日: 具体的には手をつけていない問題ではあるので個人的な見解ではあるが、現在は学生の経済状態の問題などもあり、講義外学修が難しい側面もあるため、制度として縛るのはどうかと思う。

伊藤: 鹿児島大学としての取り組みとしては特にはないが、個人としては宿題を課している。

ただし、大量のものではなく、関連する内容で、やっておかないと次の講義に影響するようなものにしていく。

という回答があった。

その他にも、フロアから「時間外(講義外)学修を示すevidenceはどうするのか、シラバスに明記するなどの要求がなされるべきものなのか」「今回のフォーラムの企画について、コンソーシアム鹿児島に加入している大学におけるFD活動の位置、すなわちどれくらいのレベルにあるのか、今後どのようにすれば進展するかという議論が必要ではないか」といった意見・提案がなされ、パネルディスカッションを終了した。

総合的に見て、やはり今回のフォーラムのメインテーマであった「FDの目的再考－実質的なFDとは何か－」というところに参加者の興味、というより疑問点が集約されている印象であった。これは、閉会挨拶を行った西先生の「FDの解釈は未だ玉虫色」という言葉にも表れているように、現時点で簡単に結論づけられる問題ではないが、文字どおり「そもそもFDとは？」という大前提を「再考」するきっかけとなったことに意義があったように思われる。

(文責 理学部 山本 啓司、 共同獣医 松尾 智英)

# 学生・教職員ワークショップ 「学生の自主的な学習を生み出す大学へ」

## 1. ワークショップの概要

**日時** 平成24年12月18日(火) 16:10～19:00

**場所** 郡元キャンパス 稲盛アカデミー棟1階 A11教室

**対象** 教育に関心のある本学の学生、教職員

学生:各学部より推薦を受けた学生2～3名、自主参加希望者(全20～30名程度)

教員:各学部、施設の学生教育に関わっている教員、教務委員、FD委員、学生生活委員、教育改革室委員

職員:各学部学生系職員(1～2名)、附属図書館、学術情報基盤センター等施設職員、学生部職員

**目標** ワークショップ終了時に、参加者は、学生が主体的に学習することの重要性と大学の役割を理解し、授業、制度、教育環境の改善を提案することができる。

**出席** 45名(学生19名、教員17名、職員9名)

学生の主体的な学習は望ましい学習成果を生み出し、自主的な学習習慣が生涯学び続ける社会人の基盤となる。しかし、平成23年度の本学2年生を対象とした学習実態調査では、学生が自習時間を確保して積極的に学習しているとは言えない現状が続いていることが報告された。

鹿児島大学では「自主自律と進取の精神」の涵養を掲げ、自立した学習者として自主的な学習のできる学生の育成をめざしている。学生が主体的に学習するために、教員には効果的な教育計画の立案と学生の学習を支援する技能の修得が求められている。また、大学には学習を促す仕組みが求められている。

本ワークショップでは、本学の事例を共有し、学生、教員、職員がそれぞれの立場から学生の自主的な学習を生み出す教育を討議して新たな提案を行い、日々の教育活動から教育環境に至る改善を目指すものである。

### 【内容とスケジュール】

時間	内容	備考	
16:10	開会挨拶	阿部美紀子FD委員会委員長(教育担当理事)	
	事例紹介	自主的な学習を促す教育活動 1)共通教育「セミナー・学問のススメ」 ※課題発見・問題解決型科目 2)学生の参加するFD活動 3)まとめ	司会 内山 博之 FD委員 教育センター 伊藤 奈賀子准教授 農学部 小平 万瑠美(1年) 教育学部 日隈 正守教授・弓削 了太(3年) 田川 まさみFD委員
17:00	グループ討議	学生の視点を生かした教育改善の提案 1)グループ討議説明 2)自己紹介 3)グループ別テーマの討議	小谷 知也FD委員
18:20	発表、討議	1)グループ発表 2)全体討議	司 会 柿内 一樹FD委員 洪井 進FD委員
18:55	アンケート記入		
19:00	閉会挨拶		

## グループ別テーマ

### (A)新たな科目を作ろう

魅力的なテーマや教育方法により【学び方を学ぶ】共通教育科目を新たに提案します。課題発見、問題解決型学習、体験などを取り入れ、学生の学習意欲を高めて自主的に学習するスキルと態度を養成する科目を構築します。

### (B)いつもの講義を変えよう

指導内容が指定されている大講義室での授業が、情報伝達の受動的学習から能動的学習へと変わり、学生の学習内容の十分な理解・発見が知的好奇心を高めて授業時間外の自主的な学習に発展する指導方法や授業の工夫を検討します。

### (C)学生の参加した教育改善の仕組みを作ろう

学生の教育に対する「声」を把握し、学生と教員の活動により自主的な学習を促す教育へと改善し、自主的な学習を評価、支援する方法を提案します。

### (D)自主学習のための教育環境を生み出そう

学生が積極的に自習に取り組み、知識や技能を修得するために必要な教育資源(教材、参考図書、資料、教員、学外指導者等)を活用できる環境整備を提案します。

## 2. 結果概要

### (1)事例紹介の内容

#### ①共通教育「セミナー・学問のススメ」

- 学びに必要なスキルの獲得を目標に、学生が6～8人のグループに別れ、話し合いを重ねながら課題設定、調査研究、プレゼンを行っていること
- 授業を通じて身につけた能力が大学での学習のみならずボランティア活動等にも役立っていること など

#### ②学生の参加するFD活動

- 学生実行委員会が中心となり、毎年度、学部教育の改善に関するテーマについてシンポジウムや教員・学生によるグループディスカッションを開催していること
- 他大学の先進事例等も参考に今後更に活動の充実を図っていきたいこと など

### (2)グループ討議の主な内容

参加者は7グループに分かれ、4つの中から事前に割り当てられた1つのテーマについて討議を行った。

#### (A)新たな科目を作ろう

#### 現状の問題点、意見など

- 15週、毎週教室で学ぶことを前提としなくてもいいのでは?
- ボランティア活動など教室外での学びを単位化する
- 学年を越えて交流できるといい
- 上級生から学べる。上級生も下級生から学べることもある
- 有名人、学長の話聞く
- 時事問題(社会)を学ぶ
- 先輩や教員から、自分がしたいことの実現方法を学ぶ「企画論(仮)」
- 単位認定への学生への関与の在り方

#### 提 案

- 「社会に学ぶ」、「社会で学ぶ」、「社会を学ぶ」  
地域/世界(大学外)  
上級生にとって受講のメリットが感じられる科目
- 何らかの活動(地域での活動、資格取得に向けた活動など)を一つの必須分野として位置付けることで、学生の自主的学習を大学(の制度)として促す

#### (B)いつもの講義を変えよう

#### 【B-1グループ】

#### 現状の問題点、意見など

- パワーポイントのみに偏りすぎ
- 先生側の知識や価値観の一方的押しつけ
- 学生からの質問が少ない
- 内容がマニアック

#### 提 案

- レジュメの電子化
- 基礎知識の応用法を教える授業・演習
- 演習・実験と講義内容をリンクさせる試み

#### 【B-2グループ】

#### 現状の問題点、意見など

- 大講義の問題点→緊張感がない
- 信頼関係を欠く教員と学生の関係
- 学生のニーズを捉えきれない教員

#### 提 案

- 終着点は学生のリアクションを引き出すための授業設計、座学・大講義からの脱却
- その手段としてのグループ学習
- 仕掛けとして、しゃべらせる、調べさせる、考えさせる、ランダムに発表させて緊張感を保つ、知識の先にどのよ  
うに役立つかを示す  
→学ぶモチベーションを高める
- 残される問題点は、ではどのような課題を与えるのか、教員のグループ学習へのサポートの必要性

(C) 学生の参加した教育改善の仕組みを作ろう

[C-1グループ]

現状の問題点、意見など

- 教師の視点
  - a. 学生が質問しない
  - b. 分かりやすいように解説するが、学生がどの程度理解しているか？
- 学生の視点
  - c. 興味のない、理解が難しい分野への意欲の低下
  - d. 共通教育科目に対する意識(単位を取るために受講)

提 案

- オリエンテーションで学生の興味ある方向へ導く
- 自主的＝興味＋責任感＋環境
- 学生と教員をつなぐ系の設け、選定された者が集まる会を設ける  
係が適宜アンケートをとるなどして、教員にも情報を提供する

[C-2グループ]

現状の問題点、意見など

- 教員が何を伝えたいのか、学生側はわからない
- 学生がなかなか本音を言えない
- 勉学に興味がない学生が多い。自主的に取り組むことが身についていない
- 教員と学生のコミュニケーションが取りやすい環境が必要

提 案

- 学生同士の組織を整え、互いに教え合うような場づくりが重要  
(例)1年生に上級生が履修のアドバイスを行う

(D) 自主学習のための教育環境を生み出そう

[D-1グループ]

現状の問題点、意見など

- 図書館は文献が古い、本の種類が少ない
- 情報基盤センターのソフト不足
- 一部の学部において、研究室や学生のためのスペースが狭い

提 案

- 授業中、あるいはピアサポート等により図書館利用方法を教える
- 情報基盤センターソフトの充実
- 無線LAN、夜間も利用できる学習スペースの充実
- 学生のモチベーションを高める  
講演会・シンポジウム等開催情報のメール配信、webによる案内  
学生が選定した講師による講演会の開催  
留学生の活用(語学)

[D-2グループ]

現状の問題点、意見など

- 学内で勉強する場所は、図書館、自習室、食堂、情報基盤センター等  
学外のファミリーレストラン等を利用することもある
- 一人で勉強するか、複数で勉強するかによって場所が変わる
- 学内の施設は利用時間をもっと長くしてほしい
- 図書館の本は1,2冊しかなく、たくさんの人が一度に読めると良い  
(インターネット上など)
- パソコン、ネットが使える環境をもっと増やしてほしい

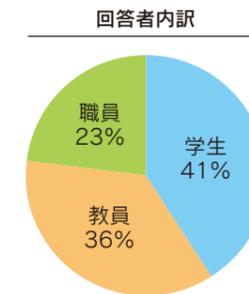
提 案

- ハード面  
夜中まで空いているグループ学習室(ネットが利用できると更によい)  
学内のファミリーレストラン、ファーストフード店、コーヒー店のような場所
- ソフト面  
古本市(使い終わった本を安く売る場。ノートも売る)  
講義をビデオに収録し、後から見直せる仕組みの導入

3. 参加者への事後アンケート結果

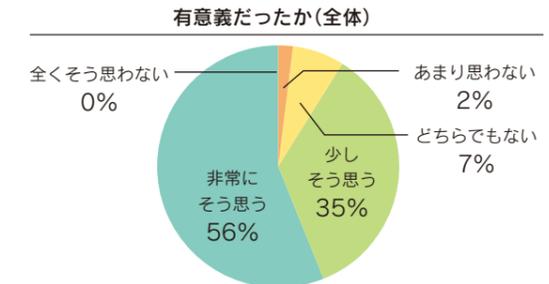
(1)参加者について

参加者:45名  
回答者:43名

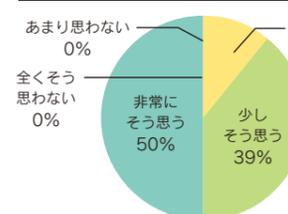


(2)本日のワークショップは有意義でしたか

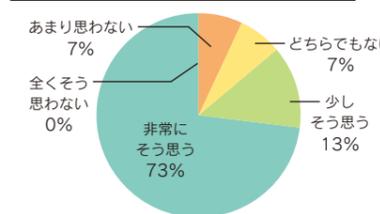
	全体	学生	教員	職員
全くそう思わない	0	0	0	0
あまり思わない	1	0	1	0
どちらでもない	3	2	1	0
少しそう思う	15	7	2	6
非常にそう思う	24	9	11	4
計	43	18	15	10



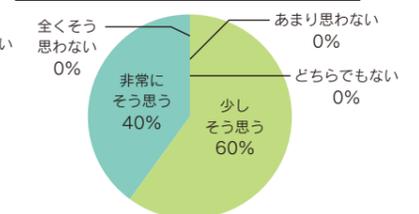
有意義だったか(学生)



有意義だったか(教員)

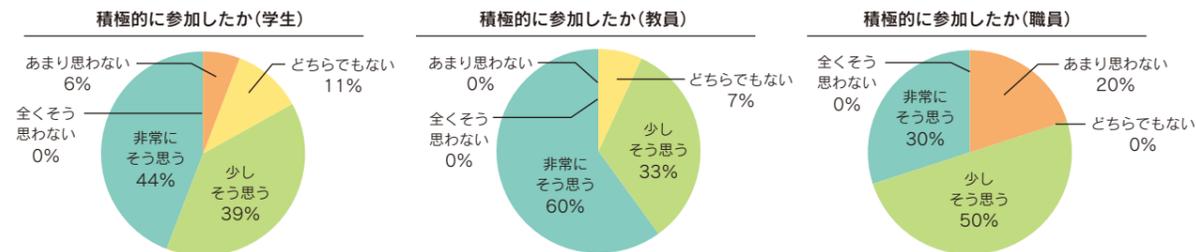
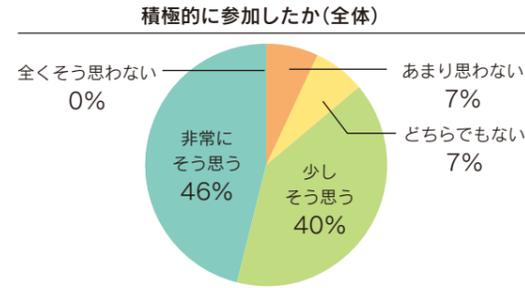


有意義だったか(職員)



(3)あなたは、積極的に参加しましたか。

	全体	学生	教員	職員
全くそう思わない	0	0	0	0
あまり思わない	3	1	0	2
どちらでもない	3	2	1	0
少しそう思う	17	7	5	5
非常にそう思う	20	8	9	3
計	43	18	15	10



(4)このワークショップに参加して、何が得られましたか。

学生

- 自分が考えている問題が、他の人にとってはむしろ改善できる点だったり、全く違う視点からの発言が新鮮でした。
- 大学の教育について参加者が真剣に考えていて、発言者の様子も尊敬できるように思いました。こうやって学生も教員も職員も一生懸命考える人たちがいることを知って嬉しかったです。多くの人がこういった会に参加できると信頼関係も増すと思いました。
- 他の人の意見を否定しないことが、こんなにうまく話が進むようになるとは思わなかった。自分がやりたい学びの意見を出せることは自分自身が学んでいるという意識につながり、自信になると思う。
- 学校について自分たち学生が考えることができることは、大切な機会であるように感じました。正しい事を提案できているかは分からないですが、何らかの形で大学に良い効果を与えることができたらと思います。
- 他学部の教授の先生方や学生の意見を聞くことができ、とても参考になりました。
- 司会の経験。先生方の意見。まとめ方。テーマが難しい時、自分自身が分かっている時など進め方や人への振り方
- 他学部の人と意見を出し合うことが出来た。学部4年生ですが、人の発表方法やまとめ方を見て、自分も見直す必要があると感じた。
- 先輩方の意見や他の班の方々の意見発表を聞くと、学生が感じていることは共通していることも多いなと思い、教員の方々には出ない案が出せることがわかりました。学生と教員のコミュニケーションは大事だと思った。
- 教員の方に自分の思いを伝えることができ良かった。知りたい情報を知れて良かった。意識の高い学生とか同じ考えの学生もいて良かった。
- みんな志が高いと感じた。
- 講義を受けるときに、どのようにすればもっと良い授業になるのか、そういった視点で考えるきっかけになったと思う。
- 普段、聞くことができない先生方の意見が聞いてよかった。
- 普段あまり関わらない方と色々話し合うことができ、とても有意義だった。教員と対等な立場で議論できたのが良かった。
- 教える側も教育について色々考えられているのだと思った。初めて参加したので(ディスカッションも初めて)、緊張したが、人と意見を語り合うのはすごく刺激的だと思った。
- 学生は、先生の意見を聞くことはあまりないので、こういった話し合いをもっとつくるべきだと思いました。(先生の率直な意見を聞くことができた)。他の学生のプレゼンが上手くて、すごく感心しました。
- 自己反省(笑) 大学での課題等を多くの立場の方々から聞け、参考になった。
- 改めて大学の内容、しくみ、問題点について考え直し、自分がちゃんと勉強しているのかも考え直せた。

教員

- 久しぶりに学生も参加するWSに参加しました。教員だけのFDやWSの企画で得られない刺激でした。学生が何を感ず考えるのかを直接聞くことができ有意義でした。
- 最後に司会の方が言われたように、普段あまり人と話す機会が少ない人は少なくないと思われるので、人と話す機会が得られた点が最も有意義だったのではないかと思います。
- 学生の生の意見がきけた。
- 学生と授業に対する取組について素直に話し合えて良かった。
- 学生の意見が聞いてよかった。
- C-1のテーマに沿った新しい授業改善のシステム提案が行えた。
- 学生が積極的に参画し、少し見直しました。
- 色々な意見がきけて楽しい会でした。
- それぞれに真剣に考えているのだなという認識を得ました。そのことを拾える場がもっと必要なのかもしれません。
- 自主的な学習の重要性がわかった。
- 学生も参加した教育改善のやり方について、熱意のある学生達やベテランの先生方の議論から、大いに学ぶ事があった。
- 教育、自主学習に対する考え。
- 学生の意見を聞いた点。他の教員がどのような点に苦労しているのかを聞いた点。課題解決型講義の重要性を実感した。
- 学生の意見を聞いた。
- 他の参加者の方の意見を聞くことができ、有意義でした。まさにグループ学習です。
- 学生さん、事務の方、他学部の先生と話す機会は貴重でした。ただし、今回の話し合いの結果がどのように活かせるのか、その検討・実現のルートも予め示されておらず、ある中のアリの印象は否めません。

職員

- 普段とは違う雰囲気学生と意見交換が出来て良かった。
- 理想と現実のギャップ。
- 元気な学生さんがいる事。
- 教育改善に伴ういろんな視点からの意見が聞いて良かった。
- 学生が立派な考えをもっていて感心しました。
- 他学部の人との交流。
- 問題点がわかった。今後の参考としたい。
- 学生さん、教員の意見が多く聞けました。なるほどと思わせる意見が多く、参考になりました。
- 自分と違う考え方に多く触れることが出来た。それぞれの立場で色々な意見が出てきて勉強になった。
- 図書館の使い方、改善方法についてアイデアをもらいました。(私は図書館関係者)

(5)ワークショップに対するご意見等を自由にお書きください。

学生

- 学部によって抱える問題に違いがあって、非常に話し合いにくかったため、理系・文系だったり、大人数の学部・少人数の学部など、グループをかためて話し合うのも意義があるのかと思いました。
- モチベーションの高い人が多く、活発な議論ができて良かったと思います。ただ、モチベーションの低い学生をどうまきこむかという点も考えないといけないと思いました。ここにくる学生は大多数ではないと思います。
- 学生の意見でもしっかりと聞いてくれて、学ぶというのはその人自身がやるものだなと感じた。ここで出た意見を少しでも学校の人に取り入れてもらって、これからもっと学生の主体性が高くなれば良いと思う。

- 良い活動になり、それが良い力として大学につながるものだと思います。
- 司会等の流れの仕方が分からなかったのが、やり方・進め方のマニュアル的なものがあれば。
- Cのテーマが少し具体的ではなく、話し合いにくかった。
- 文系と理系の比率を揃えて行った方が、意見がかたよらないと思う。教員と生徒とが話し合うことができよかった。
- 私はあまり意見を言えなかったのですが、とっさに案が出せないタイプなので、次からはもっとしっかり考えてから来たいと思いました。
- 自分は学部教授に選抜されて参加したが、周りは意欲的・自主的に参加した学生が多かった様に見える。学部毎だけでなく、サークル毎に参加者を出すようにして、意欲的ではない生徒の意見も聞ければ良いと感じた。
- 今回の結果を目に見える形で発表（HP・広報誌等）や実現を期待しています。
- 先生、役員、生徒が話し合う機会がとれてよいと思った。
- 話し合いが進むと時間がよくわからなくなってくるので、もっと頻繁に時間の通知があると良いと思った。
- もう少し学生の割合を高くして欲しかった。
- もし、あるのであれば、今後も継続的にやってほしいと思った。
- こんなにも一生懸命語っているところを、他の学生にもみせたい。
- 学部別や学科別など、もっと細分化してもいいと思います。こういった機会をもっと多くの学生に体験させるべきだと思います。
- 学部ごとに問題が異なるケースは多分にあると思います。このように全学部共通で行う前に、各々学部ごとに課題や解決策を話し合い、その中で出た全学部共通の問題に対しては、その後の全学部共通のワークショップに持ち寄り、そこでまた議論をするような形があってもよろしいのかと思います。
- もう少し、与えるテーマを具体的にしてほしい。内容が理解しにくい箇所があった。

## 教員

- WSは1つのタスクだけではなく、複数のタスクをもう少し時間をかけて共同作業する方が良いと思います。（1日とか1泊とかで）
- 課題はもう少し具体的に最終目標を設定した方がやりやすいかもしれない。（例）新科目のシラバスを作成せよ
- 年末は忙しいので、時期をずらした方がいいのではと思いました。
- 今後も続けてください。
- もう少し議論の時間がほしかった。
- 時間をもう少し長くしてほしい。
- 学生を参加させるのは非常にいいことだと思います。
- 終了時刻を早く設定してもらいたい。
- ここで出た意見を参加者（というか全学）に返す仕組みが要ると思います。テーマ次第ですが、職員の方が話しやすいテーマが取り上げられると良いかなと感じました。
- 面白かった。
- 本日のワークショップでは、いろいろ学ぶ事ができた。教員と学生とのコミュニケーションの重要性を深く認識できた。
- 初めて参加しましたが、学生教員それぞれの意見が得られて、またコミュニケーションもとれたのではないかと思います。もっとこういう機会が増えれば良いと思います。
- 他学部の取り組みを聞いて参考になった。
- 難しいとは思いますが、提案から課題解決にまでもっていけるような議論ができればと思います。
- 率直に申し上げて、前半の事例紹介は後半のグループ討議とどのように関わる内容であったのか、理解し難い面があるように感じられました。

## 職員

- もう少し、討議の時間の割合を増やしても良いのではと思った。
- 多くの学生が自由参加できるシステムの構築。
- 教員にも学生にも時間的余裕を持たせる工夫が必要。技術的な提案で可能な事は、少しずつでも取り入れていってほしい。WSの意味を示してほしい。
- これからも積極的に取り組んでもらいたい。
- きびしいことを言いますと、すでに言われていることがほとんどで、目新しい意見はなかったという印象です。グループでの意見交換は、とてもたのしいものでした。
- 進め方が思ったよりよかったので、充実した時間が持てた。
- 今後もワークショップを続けてほしい。
- 出された意見、発想等々、実現できるものは1つでも多く実現していただければと思います。
- 職員の立場だと少し難しいテーマだった。
- 参加した学生が非常に積極的なのに感心しました。

※今後、FD委員会で取り上げてほしいテーマがありましたら、お書き下さい。

## 学生

- 日本一休みが多い大学といわれる、鹿大の休みの多さについて。（東大を抜いて）
- 大学での教育に興味を持ち始めるにはどうすればいいのか。
- 文系学生の自習、討論の場。理系と異なり、研究室をもたない学科もあるため。
- 広報の広がり具合、図書館のしくみ、講義室の使用の許可など知らないことが多かった。

## 職員

- 全学統一のFDシステム構築。全学GPAの全学統一基準（絶対GPA）
- 事前アンケートを取ってはどうか？
- またまたピア・サポートとか？

## 4. おわりに

事後アンケートをみると、ワークショップは有意義だと受け止めた参加者の割合は総じて高くなっている。特に教員では73%が「非常にそう思う」と回答しており、教員にとっては貴重な機会になったといえよう。

今後、自主的な学習の重要性をより多くの学生等に理解してもらうため、ワークショップに、更に多くの参加者を得ることについて検討が必要であろう。また、大学側に建設的な提案をしていくために、議論のテーマを絞り、より具体的な提言を行うことをワークショップの目的とすることも考えられる。

また、学生の自主的な学習を促すためには各部署におけるFD活動が大きな鍵となることから、必要な取組みを各部署へいかに波及させるかも重要である。

今回のようなワークショップ等の機会を積み重ねることにより、教職員と学生が、さらには教職員同士、学生同士が対等な立場で率直に意見を交換し相互理解を深める中で、「学生の自主的な学習を生み出す大学」が創造されることを願ってやまない。

(文責 法文学部 柿内 一樹)

# 鹿大版FDガイド第4号、第5号の発刊にあたって

前年度に引き続き、鹿児島大学FD委員会では鹿大版FDガイドの発刊を行った。今年度に入り、担当ワーキンググループの構成メンバーが一新され、新たな体制での活動となった。FDガイド第3号までに取り上げられたテーマ、「授業にピア活動を取り入れる」、「同僚の授業から学ぶ」及び「授業改善のためのヒント(1)」は、いずれも授業改善や履修指導に関わるヒントの提供を中心として企画されてきた。第4号以降についても同様のコンセプトを踏襲することとしたが、新たなテーマについても模索するために、平成24年7月にFD委員会委員を対象として、ガイドに取り上げたいテーマの公募を行った。その結果、回答が多かったのは「効果的な授業改善法」、「学生とのコミュニケーション法、フィードバック法」、「教材作成、Eラーニング」などであった。そこで、第4号では過去3号との継続性を持たせるために「効果的な授業改善法」に関して、「シラバス」に関する情報提供をテーマとして採用した。これは、平成24年9月に実施された本FD委員会主催の「新任教員FD研修会」において、教育目標達成やカリキュラムの構成要素といった観点から授業について考える機会が設けられ、ここでも「シラバス」が一つの話題となった経緯を踏まえたものである。ガイドに記載した内容は、全国の高等教育機関の大半で作成されており、本学でも10年以上前から作成が義務付けられているシラバスについて、原点に立ち返り、その「語源」や「基本的な役割」、「対象別の意義や効果」などについて比較的平易な言葉で記載を行った。

第5号では、前述のアンケート結果をふまえ、教育場面で困難を伴うことが多い「コミュニケーション」に関する内容を、多面的に検討することとした。執筆については、本WGメンバーである臨床心理学研究科の金坂先生に、主として授業や学生指導の場面で直面することの多いコミュニケーションの難しさという視点から記載していただくよう依頼した。このテーマは、教育に関わるステークホルダー全てにとって非常に重要ではあるものの、一般的に簡潔で明確な処方箋があるわけではないため、手軽で具体的な万人向けの“How to”形式で記載するには困難な内容であった。そのため内容は、「私の心とあなたの心は違う」、「わかってくれているはず、という期待はたいてい裏切られます」、「その言葉、伝わっていますか?」、「コミュニケーションって、だから本当は難しいのです」といった構成でエッセイ形式での記載を採用し、読者にコミュニケーションにおける問題点の認識と共有化を図ってもらえるように意図した。

第4号の「シラバス」、第5号の「コミュニケーション」いずれも、テーマとしては非常に広範な内容を含むため、FDガイドの次号以降、継続してテーマとして採用していただき、より深く検討していく必要があると考えられる。

(文責 歯学部 田口 則宏)



# 鹿児島大学共通教育における学習実態・学習成果に関する調査

## 1. 調査の目的

今回の調査は、以下の二点について的確に状況を把握し、本学の教育改善に資することを目的として企画された。

第一に、共通教育科目等を受講する学生の実態の把握である。授業においてより高い教育効果をあげるためには、学生の基礎知識がどのようなものか、どのような学習ニーズをもっているのかを把握しておく必要がある。それらが分かると初めて、効果的な教育改善の方法を考えることができるのである。

第二に、これまで本学が行ってきた様々な改革や教育改善活動の適切性である。本学では共通教育科目等について、科目の新規開設や整理をはじめとして様々な改善を加えてきた。そうした改善の成果が適切に現れているかを検証するということである。

本調査の結果は、共通教育科目等として開講される個々の授業の改善だけでなく、カリキュラムや教育環境の整備に向けた貴重なデータともなる。同時に本調査の結果は、専門教育の改善にも活かされるものである。専門教育の中心はほとんどの学部で2年次後期以降にある。そのため、2年次前期までの学習を終えた学生の実態を把握することにより、より適切な専門教育を行うことが可能になる。

## 2. 調査概要

調査実施者: 2011年度鹿児島大学全学FD委員会

調査テーマ: 鹿児島大学の学生の学習実態や成果及びそれらに対する意識

調査方法: 授業時の質問紙による自記式調査

調査時期: 2012年1~2月

調査項目: 日頃の行動・習慣・考え/共通教育科目等の授業における学習の仕方/共通教育において入学時点と比べて変化したこと/鹿児島大学に対する思いなど

## 3. 調査対象者

学 部	送付枚数	対象者数(注1)		回収枚数	回収率
		2年生(2010年度入学)	(内留学生数)		
法文学部	430	399	1	242	60.65%
教育学部	320	286	0	204	71.33%
理学部	220	186	1	64	34.41%
医学部(医学科)	130	101	2	45	44.55%
医学部(保健学科)	150	121	1	91	75.21%
歯学部	80	49	1	47	95.92%
工学部	450	412	5	324	78.64%
農学部	280	248	2	193	77.82%
水産学部	180	144	0	99	68.75%
合 計	2240	1946	13	1309	67.27%

注1) 対象者数は、教務WEBシステム 統計資料(入学者集計表-2010年度入学)から引用

## 4. 調査結果

共通教育における学習実態・学習成果に関する調査結果は「鹿児島大学共通教育における学習実態・学習成果に関する調査2011年度調査報告」にまとめられたが、各質問事項に関して2010年度調査との比較結果は以下のとおりである。

### 問1. 基本事項

平均的には高校時の成績は良く、しっかりと勉強して、大学入試成績もできたと感じている学生が入学している。ただし、学部・学科が第一志望ではなかった学生や、高校時に学習習慣が身につけていなかった学生も全体の4分の1から3分の1が入学しているので、これらの学生の学習指導を適切に行わなければならないことが分かる。

### 問2. 日頃の行動・習慣・考え

#### ▶ 大学内外での行動

おおむね授業にはきちんと出ているが、「とてもあてはまる」学生が昨年度よりわずかに減少し、単位の取りやすい授業を受講している学生が増えている。クラブ・サークル活動に力を入れている学生が昨年度よりわずかに減少、アルバイトに力を入れている学生がわずかに増えている。ボランティア活動は昨年度とほぼ同じ割合である。正課外活動への能動的な参加を行うように指導する必要がある。

#### ▶ 習慣・関心

自身の健康以外は新聞、読書、政治・経済の全てにわたって昨年度より関心が低くなっている。これらは、社会人になるための、基本的な素養と考えられるので、積極的な指導が必要と思われる。

#### ▶ 鹿大在学中の抱負

特に教養と専門的知識・技能を身につけたいと考えている。また国際感覚を身につけたい学生が、昨年度より増加しており、海外留学支援制度を学生に積極的に広報すれば、さらに増加するのではないか。

#### ▶ あなた自身

自分への自信や鹿大生であることへの誇りが昨年度より減り、将来に対する不安や将来の職業がはっきりしない学生もわずかではあるが増えている。これらに対しては、大学側の広報や、将来設計に関する適切な指導が必要と思われる。

### 問3. 共通教育科目等の受講状況及び予習・復習の時間

どの科目においても、学習時間が少ない。予習・復習時間は外国語、基礎教育科目では比較的多いが、それらの科目でも1回につき1時間以上予習・復習している学生の割合は半数以下で、授業を聴講するだけが多い教養科目では予習・復習をするまでには至っていない。授業の学習態度などについて具体的な改善策を検討すべきだと思われる。

### 問4. 共通教育科目等の授業における学習の仕方

ノートの取り方や整理の仕方が身についた傾向がやや増えているが、教員にわからなかったところを質問するといった積極的姿勢までは身につけなかった学生が増えている。学習方法の実践を習慣化した場合には身につくと答える学生が大多数であることを、積極的に、学生や教職員に伝えるべきであると思われる。

### 問5. 共通教育科目等において受講した授業形態

少人数でおこなうグループワーク、実験・実習・調査中心の授業に対する満足度は高いが、講義中心の授業に対しては「役に立たなかった」とする回答が増えている。また宿題が多く出される授業は約半数の学生が受講しているが、「とても役に立った」という学生が昨年度より減少している。講義中心の授業や、PCを利用する授業では、全体的な満足度は確保されているが「役に立たなかった」と感じている学生も2割程度いるので、授業方法に改善を加えることが望まれる。

### 問6. 共通教育において経験したこと

ミニッツ・ペーパーやゲスト・スピーカー、小テスト経験は昨年度同様多かった。しかし、その他の経験も含めて、それらによる学習動機の変化に結びついたと実感している学生の割合は昨年度に比べて全体的に減少している。海外研修参加学生の割合は未だ少ないが、それによって学習動機が「とても高まった」学生の割合は昨年度より増加した。学生と教員の相互交流、そして学生同士の交流で学びあう経験が必ずしも十分でないことと思われ、教員等との交流、学生間の学びあいを積極的に推奨すべきだと思われる。

### 問7. 共通教育において入学時点と比べ変化したこと

外国語能力が微増したが、全体としては能力が落ちたという回答が3分の1以上見られるがG-TELPのスコアはやや伸びている。この結果はアンケート時期(2年後期)の関係かもしれない。他の全ての力において昨年度より「伸びた」割合が減少している。とくに情報を収集・分析して活動する力、自主的・自律的に学ぼうとする力、異なる考え方・価値観を理解する能力を伸ばたと実感している学生が減少している。設問が多岐にわたっているため、最も多い回答は「どちらともいえない」となっているが、各種の能力の水準(レベル)に関する合理的な基準を明らかにしたうえで、学生が個人の能力の伸びを実感できるような改善策が必要と思われる。

### 問8. 共通教育の授業をとおして身についた知識・技能・態度

科学技術・数理を除けば、全体としては身についた知識・技能・態度をポジティブにとらえている傾向がある。ただし、問7の回答結果と必ずしも一致していない。専門分野に関連した基礎的知識・技能が身につけなかったとする回答数が昨年度よりやや増えている。

### 問9. 今学期(4期)中における各活動の一週間あたりの平均時間

問1の学習時間の回答と対照的に、入学後の1週間の学習時間が5時間以下の学生が半分以上を占めていることは単位数に対する学習時間の規定が空洞化していることを示している。文科省の調査などでは、共通教育で勉強習慣のついていない学生は、高学年になっても勉強習慣が改善しない可能性が高いことが示されている。この学習時間では学習の質・量ともに確保できないことを考えれば、自らの勉強時間を振り返る習慣をつけることが必要であると思われる。

### 問10. 鹿児島大学に対して

相談できる体制や、大学が新しいことに挑戦しているとの回答がいずれも低くなっている。この2項目に関しては、原因を確かめたうえで改善すべきであるが、学生に対する効果的な広報を考えるべきではないか。

なお、先の調査報告には以下のような学生へのメッセージを添えた。

## 本調査の結果集約を終えて

### ～ 学生さんへのメッセージ ～

#### はじめに

2012年1～2月にわたり、当時2年生だったみなさんが回答した結果がまとまりましたので、ここにお知らせします。この結果を、現在の大学生生活を振り返り、これから卒業までの大学生活の一層の充実を目指して活かして欲しいと思います。

#### 大学を取り巻く社会の変化

大学および大学生に対する社会の視線は年を追うごとに厳しいものとなっています。就職事情の厳しさについては、既にみなさんも感じ始めていることでしょう。しかし、問題はむしろその後です。

卒業後の社会では、即戦力として活躍することが求められます。現状を的確に把握して問題を発見し、その解決方法を考え出すこと、周囲の人びとと協力して物事に取り組み、課題解決に向かって行動していくこと、すなわち一步を踏み出す力が要求されます。また、技術革新や社会情勢の急速な変化に対応できるよう、自ら進んで能力を高めることのできる力(進取の精神)が、以前にもまして重視されるようになっていきます。このような力を大学生の間に身につけたかどうか問われるのです。

#### 浮かび上がる鹿大生像

2010年度に引き続き行われた今回の調査結果から浮かび上がった鹿大生に多くみられる特徴は、以下のようなものでした。自分自身を振り返ってみて、当てはまると思いますか。

- ・高校までに一定の学習習慣を身につけたうえで入学し、まじめに授業に出席している
- ・自主的な学習活動や読書、ボランティア活動への参加などにはあまり積極的とはいえ、クラブ・サークル活動に力を入れる学生は昨年度より少し減っている
- ・入学後の学習時間の短さや能力の伸長が不十分な現状を、ある程度自覚している

#### みなさんへの提案

[毎日の過ごし方を少し変える]→ ちょっとだけ積極的に動いてみよう！

- ・授業後、オフィスアワーを利用し、教員に質問してみる
- ・図書館に行って、新聞に目を通す。読む本について職員に相談してみる
- ・ボランティア支援センターに登録し、ボランティア活動に参加してみる

[大学以外の世界にも目を向けよう！]

- ・教室外の活動(野外活動・地域との交流・合宿型)がある授業を受講してみる
- ・短期海外研修を含む授業に参加してみる(費用支援制度あり)
- ・大学関係者以外の方と交流を持とう(ボランティア活動、課外活動)

#### おわりに

今すぐにはできることはいくつもあります。今の自分自身を少し変えるために何が必要でしょうか。この調査の結果が、みなさんが大学生としてこれからの毎日をどう過ごしていくか、大学生としてどうあるべきかを考えるきっかけになることを願っています。

追記:2010年度、2011年度のアンケートの質問内容は調査の継続性を考え、全く同じであったが、2012年度アンケートでは、問9の各活動時間について、この2年間の調査で、ほとんど時間がとられていない「ボランティア」を除き、かなりの時間を使っていると思われる「読書・新聞・ビデオ鑑賞等」と「インターネット・SNS等」を加えた、また、「授業とは関係のない学習」に(資格取得等)の注記を行った。

2013年1月から2月に行った「共通教育における学習実態調査・学習成果に関する調査」の集計結果は以下のとおりである。このアンケートに関する解析は2013年度に行われる予定である。これによって「共通教育の学習実態調査・学習成果」に関する3年間の動態が明らかになると思われる。

学 部	送付枚数	対象者数(注1)		回収枚数	回収率
		2年生(2011年度入学)	(内留学生数)		
法学部	430	409	2	318	77.75%
教育学部	320	291	1	188	64.60%
理学部	220	199	0	130	65.33%
医学部(医学科)	150	130	2	102	78.46%
医学部(保健学科)	150	125	0	90	72.00%
歯学部	80	57	1	44	77.19%
工学部	560	537	13	352	65.55%
農学部	270	243	0	107	44.03%
水産学部	170	143	1	100	69.93%
合 計	2350	2134	20	1431	67.06%

注1)対象者数は、教務WEBシステム 統計資料(入学者集計表-2011年度入学)から引用

(文責 理工学研究科 仲谷 英夫)

# 教育・学生支援担当教職員講習会 (新入生オリエンテーション説明者講習会)

## 1. はじめに

新入生は、高校までとは大きく異なる生活環境の中で様々な問題に遭遇する。科目履修など、学生生活に慣れれば解決できる問題もある一方、高学年次においても学生自身の手では解決が困難な問題もある。それら諸問題に適切に対応するためには、学生の現状と学内の組織的対応に対する理解が不可欠である。

そこで今年度も、主に平成25年度新入生の支援に携わる教職員・学生の方々を対象として、「平成24年度 教育・学生支援担当教職員講習会(新入生オリエンテーション説明者講習会)」を開催し、適切な履修指導、学生指導ができるよう説明をした。

**日時** 平成25年3月26日(火) 13:00~17:15

**場所** 郡元キャンパス 共通教育棟3号館2階321号教室

**対象** 各学部の教務担当教員、学生生活担当教員、新入生オリエンテーションにおける説明教員、各学部の新入生クラス担任等教員、FD委員、各学部の学生系職員・学生部職員、新入生支援の活動を行う学生、その他参加希望の教職員・学生

**参加者** 154名

## 2. プログラム

司会進行:伊藤 奈賀子 (FD委員、教育センター准教授)

時間	内容	担当
13:00~13:10	開会挨拶	阿部 美紀子 (FD委員会委員長、教育担当理事)
13:10~14:30 (80分)	共通教育科目の履修指導について(質疑応答含む) ●新カリキュラムの特徴 ●履修指導上の注意点	教育センター 中島 あや子(教育センター共通教育企画実施部長) 共通教育係職員
14:30~14:40	休憩	
14:40~15:10 (30分)	傾聴と対話からの自己理解	講師:川池 陽一(保健管理センター准教授)
15:10~15:40 (30分)	学生生活におけるトラブルの現状と対策 ●飲酒問題 ●不審者、カルト、学内での盗難 ●交通事故 ●ネット利用に関する諸問題 ●学生の懲戒 その他	学生生活課職員
15:40~16:10 (30分)	学生支援について 奨学金(10分)、授業料免除(10分) 課外活動・保険、ボランティア活動(10分)	
16:10~16:20	質疑応答	
16:20~16:30	閉会挨拶	門 久義(教育センター長)

## 3. 内容

最初に、阿部美紀子FD委員会委員長(教育担当理事)から、講習会の趣旨説明を含めて開会の挨拶があった。

続いて、共通教育科目の履修指導について、教育センター共通教育企画実施部長の中島あや子教授から、平成25年度から始まる新カリキュラムの概要の説明がなされた。また、教務課共通教育係からは、卒業要件単位数、4月の主な行事と履修登録、Webによる履修申請の要領など、履修指導上の注意点について配布資料に基づいた詳細な解説がなされ、窓口や掲示板、5月以降の主な行事なども紹介された。

休憩の後、保健管理センターの川池陽一准教授から「傾聴と対話からの自己理解」と題した講演があった。講演では、学生の相談内容には援助の在り方が異なる2種類があり、答えのある相談には、適切な指示が援助的であり、答えのない相談(例えば、進路選択、職業選択など)には、相談者自身が心の実感から最善の答えに気付くよう見守ることが援助的であることなど、カウンセリングの実績と理論に基づいた学生支援の在り方に関するお話をいただいた。

次に、学生の現状と学内の組織的対応についての理解を深めるため、学生生活課より説明が行われた。飲酒問題、不審者、学内での盗難、学生の懲戒、ネット利用に関する諸問題、交通事故、課外活動中の安全など、学生生活におけるトラブルの現状と対策について説明が行われた。また、奨学金、授業料免除、学生保険、学生のボランティア活動支援などの学生支援について説明が行われた。

最後に、門 久義教育センター長から閉会の挨拶があり、学生を多面的な観点からみて対応することの重要性と本日の情報をオリエンテーションばかりではなく日常の学生指導・支援にも活かしてほしいと締めくくられた。

## 4. まとめ

本講習会「平成24年度 教育・学生支援担当教職員講習会(新入生オリエンテーション説明者講習会)」では、平成25年度から大きく変更される共通教育カリキュラムの変更点や履修内容について、また学生生活でよく発生するトラブルの実態と学内での対応に関する情報が提供され、教職員が情報を把握・共有することで適切な学生指導や学生支援に役立つものと思われる。また、「傾聴と対話からの自己理解」と題した講演からは学生相談への援助の在り方について有用な情報が得られ、有意義な講演会であった。しかし、終了後のアンケート結果からは配付資料の工夫などにより学生指導に役立てられるような工夫を求める意見があり、今後の検討を要すると考えられた。

(文責 教育学部 松井 智彰、農学部 境 雅夫)

# 教育センター高等教育研究開発部(共通教育)のFD活動

## 1. はじめに

平成24年度の高等教育研究開発部会は活動計画として以下の6点を掲げた。このうち、①～④は前年度からの引き継ぎ事項、⑤、⑥は新規事業である。

- ①前後期の中間授業アンケート実施
- ②前後期の「授業改善に資するアンケート」(期末)の実施及び授業担当教員から提出される「授業改善メモ」(報告書)の集約と教育改善等の取り組み事例の公開
- ③前後期の共通教育科目に関する授業公開・授業参観の企画・実施
- ④教育センターオープンクラスの企画・実施
- ⑤「鹿兒島大学共通教育における学習実態・学修成果に関する調査」の結果に基づく改善策の検討
- ⑥大学地域コンソーシアム鹿兒島と連携した企画の検討

①、②については、前年度に改訂した中間授業アンケートおよび授業改善に資するアンケートを初めて前後期とも実施した。中間アンケート、授業改善に資するアンケートとも、実施方法については前年度を踏襲した。ただし、授業改善に資するアンケートについては新たな試みとして、授業担当者から提出された授業改善メモから授業改善に向けた工夫や試み、授業改善に関する意見や要望の共有を目的とした「授業改善メモのまとめ」を作成した。これまで個々の授業担当者の授業内にとどまっていた様々な工夫が共有されることにより、さらなる授業改善が図られると考えられる。また、意見や要望を関係各所に伝えることにより、他の委員会や部署との問題共有を図るとともに改善を促した。

③、④は前年度と同様に実施した。ただし、④については前年度に続いて参加者の拡大を図り、市内在住の本学1年生の保護者にも案内を送付し、本学における教育の現状や施設設備についての理解を深める機会とした。

⑤、⑥は新規事業であり、十分な検討は行うことができなかった。⑤については検討結果を主催したFD委員会に示すことはできたが、本調査は今年度実施されたものでいったん終了するため、検討結果が活かされるかどうかは不明である。また⑥については、FD委員会によって「FD・SD合同フォーラム」が企画・実施されたものの、本部会としての関与は困難であった。本事業については来年度以降再検討が必要である。

いずれの企画も部会委員でワーキンググループを組織し、内容の充実に向けて取り組んできた。ここでは、企画の実施内容およびアンケートの結果について報告する。

## 2. 中間授業アンケート

学生への中間授業アンケートは、前期は5月21日、後期は11月14日から約1カ月間、授業担当者に依頼して実施した。中間授業アンケートは、その結果を受講している学生に反映することを考慮して授業期間の途中に行われている。また、自由記述の欄が設けられているものの質問内容は短く、回答形式がチェックによるものである。そのため、入力・集計を行うにあたりMoodleが有効に活用できる。

教育センターでは、中間授業アンケートの実施にはMoodleを活用することを推奨しており、平成21年度後期からアンケートの方法別に実施状況を調べている。平成21年度～平成24年度の後期実施状況について比較した結果を表1に示す。今年度は教育センターで用意したアンケート用紙を使用した担当者の授業数は平成23年度と比較して10科目減少し、アンケート用紙の配布数も平成23年度16,544枚、平成24年度15,912枚と減少していた。一方、

Moodleを活用した授業は平成23年度48科目、平成24年度54科目となっており、微増している。ただし、21%を占めていた平成22年度に比べ、14.6%と減少している。全科目数から考えると、紙媒体を使用している授業担当者の割合も85.5%から80.5%と減少している。Moodleへの移行が望まれるが、現状では、アンケートをMoodleで実施すると学生からの回答が得られにくい傾向がある。今後はアンケートの実施方法やMoodleで実施した際の学生の回答を促すなど方策を検討する必要がある。

また、中間授業アンケートの結果は各教員が直接集計するものであり、教育センターとして集約していない。そのため、組織的なカリキュラムや授業の改善に活かすことが困難な状況にある。組織的な教育改善につなげるためにも、アンケートの内容も含めて改善を図る必要がある。

表1 中間授業アンケートの実施方法

実施方法	平成21年度(後期)		平成22年度(後期)		平成23年度(後期)		平成24年度(後期)	
	科目数	割合(%)	科目数	割合(%)	科目数	割合(%)	科目数	割合(%)
教育センターのアンケート用紙(配付用紙数)	328 (16,980)	84.8	273 (10,443)	70.7	307 (16,544)	85.5	297 (15,912)	80.5
教員独自の用紙	10	2.6	23	6.0	1	0.3	3	0.8
moodleでの実施	47	12.1	81	21.0	48	13.4	54	14.6
その他	2	0.5	9	2.3	3	0.8	15	4.1
計	387	100.0	386	100.0	359	100.0	369	100.0

## 3. 授業公開・授業参観

学内教員に対する共通教育科目の授業公開・授業参観を、前期は6月18日(月)～6月29日(金)に、後期は10月29日(月)～11月9日(金)に実施した。前期は、参観者がのべ6名で、参観の行われた科目数は、教養科目4科目(うち推奨科目1科目)、基礎教育科目2科目(うち推奨科目2科目)の計6科目であった。

後期は、参観者がのべ3名で、参観の行われた科目数は、教養科目1科目(うち推奨科目1科目)、外国語科目2科目(うち推奨科目1科目)の計3科目であった。前年度当該期に実施した学生の授業アンケート結果を基に推奨科目を提示しているが、参観された授業の約半数は推奨科目であった。

本企画については参加教員の減少が顕著である。これまでは参観者の授業改善を目的として参加を促してきた。しかし、授業の内容や方法に関する情報が充分でなく参観科目が選びにくい、目的の異なる科目の授業方法は活かしにくいなどの意見がある。また、全部局において体系的なカリキュラムの構築に向けた取り組みが勧められているものの、共通教育科目に関してはまだその中に充分組み込まれていない。そのため、共通教育科目を参観する意義が理解されにくい状況がある。今後は共通教育科目の授業参観の目的そのものを見直し、教育改善に資する取り組みとして位置付け直すことが必要である。

## 4. 教育センターオープンクラス

### (1) オープンクラスの概要と実施状況

オープンクラスは高校生以上の一般市民を対象として、共通教育の授業及び学内の施設を学外に広く公開し、本学の教育活動全体を市民の視点から点検してもらうことによって教育改善を図ることを目的として実施している。平成24年度は、11月20日(火)～11月26日(月)に開催した。

参加者の募集に当たっては、ポスターを作成し、南日本リビング新聞社および南日本新聞「みなみのカレンダー」への掲載依頼、市内書店店舗、鹿児島市内公共施設及び高校へのポスターの送付、各学部へのポスター掲示の依頼と大学ホームページへの掲載、さらに昨年度参加者へのダイレクトメールの送付等を行った。さらに、平成24年度は、試行的に市内在住の1年生の保護者へも案内を送付した。募集に当たり、ボランティア支援センターの協力をいただいた他、各学部へ募集案内の掲示依頼、鹿ナビボランティアサークルへの依頼、ボランティアに登録している学生へのメール配信等を行った。水産学部附属鴨池海洋生産実験室、総合研究博物館、キャンパス史跡めぐり、北辰蔵、中央図書館の施設見学は、担当の教職員に説明を依頼した。

平成24年度の公開授業科目は333科目、授業見学科目数のべ102科目に対して53名の見学者があった。また、本学郡元キャンパス内の主な施設見学日として11月23日(金・祝日)を設定した(表2参照)。参加者数は鴨池海洋生産実験室13名、総合研究博物館7名、キャンパス史跡めぐり10名、北辰蔵15名、中央図書館14名であり、部会委員及び学生ボランティアも同行し、担当の教職員から各施設及び史跡について説明を受けた。生協中央食堂で行った交流会では、部会委員・教職員10名と学生6名、参加者9名(うち高校生5名、保護者3名、一般1名)との懇談が和やかに行われ、後半は参加者から本企画及び本学に対して意見が述べられた。なお、週末にも関わらず協力していただいた教職員、ボランティア学生に紙面を借りて感謝する次第である。

表2 オープンクラス施設見学時間割

	11/20 (火)	11/21 (水)	11/22 (木)	11/23(金) 祝日:共通教育通常授業		11/26 (月)
1時限	授業1	授業1	授業1	9:00～10:00 総合研究博物館見学	授業1	授業1
2時限	授業2	授業2	授業2	10:00～11:00 キャンパス史跡めぐり 11:00～12:00 北辰蔵見学	授業2	授業2
昼休み	-	-	-	12:15～14:00 学生・教員との交流会	-	-
3時限	授業3	水産学部附属 鴨池海洋 生産実験室	授業3	14:00～14:30 附属中央図書館見学	授業3	授業3
4時限	授業4	授業4	授業4	授業4		授業4
5時限	授業5	授業5	授業5	授業5		授業5

### (2) オープンクラスに関するアンケート調査の結果

一般市民参加者68名のうち、アンケート提出者は56名であった。

本行事を知った契機については、新聞2名、公共機関等へのポスター4名、高校への案内9名、ホームページ6名、ダイレクトメール27名、情報誌2名、その他6名(知人からの紹介等)であった(複数回答)。今年度は施設見学を祝日に設定したことについて、「土曜日がよい」18名、「日曜日がよい」8名、「平日に組んでほしい」13名、「その他」10名、未回答7名であった。「その他」の回答としては、「今回のやり方でよい」、「特にない」等があった。これからも参加したいかという質問に対して25名が「積極的に参加したい」、31名が「時間があれば参加したい」と答えていた。参加の理由として、「鹿大の授業/施設への興味」、「大学の雰囲気味わう」、「保護者として」、「教養のため」、「進学の参考」、「公開授業の参考」等が挙げられていた。自由記述では、「授業内のコミュニケーションだけでなく、ミニッツ・ペーパー、Moodle等を利用して一人ひとりの学生に考えさせることを促している点が印象的だった」、「学生の発表の細かい点まで、的確に聴き取り、即座にフィードバックしている授業が印象的だった」、「高校との学習の違いを感じた」、「難しい授業だったが、子どもは熱心にペンを走らせて、ちゃんと授業を受けていたので感心した」等の意見が記されていた。参加の理由は大学に対する興味や個人的な大学での生涯学習につながる企画として捉えている参加者に加え、受験(編入)前に学内の雰囲気を知りたいと希望する内容もみられた。さらに、大学の施設や環境整備に触れた内容も書かれていた。また、交流会においても参加者から参観した授業に対する意見も出され、学内のアンケートでは得られ難い市民の視点からの意見を聞く機会となった。授業見学科目数はのべ102科目、のべ86枚のアンケートが提出された。

授業担当者に対してもアンケートの提出を依頼し、3項目の質問について記述による回答を求めたところ、28名の授業担当者からアンケートが提出され、以下のような結果となった。

#### ① 一般見学者を授業に受け入れて、授業を行う上で工夫(配慮)した点

アンケートに回答した教員の7割が、一般見学者に対し何らかの工夫(配慮)を行っており、その内容としては、「資料を配付した」8名、「授業の進め方を工夫した」5名、「授業に参加させた」4名、「見学者がリラックスできるようにした」2名、「授業内容を配慮した」1名となった。これらの工夫は今後とも継続していただきたい。

#### ② オープンクラス授業見学への意見

- 特に高校生にとっては、授業を見学することで講義の雰囲気を体験することができ、その結果大学に対する具体的なイメージがわくので、オープンクラスは大学を知る意味で効果的だと思う。
- ご見学者の感想では、喜んでいただけたようで幸いです。分かりやすく、興味を持てるような内容をと心掛けているのですが、一般見学者の方が授業を受けるということで、自分の授業を見直し内容を検討しますので、よい企画と思います。
- 熱心な見学者においでいただくことは、学生諸君にとってもよい刺激となり、大変よいことだと思います。教員にとっても、マンネリを防ぐよい機会です。今後とも社会に開かれた大学を目指すように、心がけたいものです。
- 学生が緊張するので、授業を行いにくいと思います。また、いつもは教室に入ると賑やかな学生たちが、ほとんどしゃべらずに教室に座っている光景は、本来の学生を見てもらえていない気がします。
- これまでどおりで良いと思います。学生の保護者に教員の姿を見せるのは良い試みだと思います。
- 教員の側にとっても、ある種の緊張感が生まれるので良い。
- 見学者は、前期に当講義を受講した学生の保護者であると紹介されていた。本学の保護者参観の良い機会になると感じた。

## ③要望・提案等

- 教育活動を知っていただくのであれば、鹿兒島や焼酎に関する鹿兒島大学ならではの授業を見ていただいたほうがいいのではないのでしょうか。また、学内施設ということであれば、授業時にパワーポイントやDVDを使用している授業やコンピュータールームを使用している授業を見学された方が趣旨に合っていると思います。
- 一般の人々が、大学の授業で勉強してみたいという要望などを(具体的な要望や希望事項)把握して、それに合う授業があるかを探してみる事です。そして、これからの時代は、大学がその地域社会と共に生きる、共に歩むことがさらに要求されるので、オープンクラスに対する期待はますます増えてくるであろうと思います。
- 地域のメディアでもっと広報した方がいいとおもいます。
- 一般社会人に開かれた大学は、本来のあるべき姿ではないかと思えます。
- こうした機会を学外の方に提供することは有意義なことであり、継続して欲しいと思います。また、見学者の方がどういう理由(きっかけ)で授業の参観を希望されたのか事前にお知らせいただければ、配布資料等にさらに工夫ができると思いました。
- ①一般の市民は、なかなか大学の実際の授業を参観する機会がないので、大学の授業を身近に知ってもらおうという意味では有意義だと思う。  
②大学外部の方々の方が、新しい観点から大学の授業に対する意見を述べてもらえると思う。  
③大学側は、この意見を踏まえ、今後「教育活動や学内施設」に関して改善してもらいたい。

## 5. 授業改善に資するアンケート

## (1)アンケートの概要

授業アンケートは、平成23年度後期よりその名称を従来の「授業評価アンケート」から「授業改善に資するアンケート」に変更し、設問内容も授業改善により活用できるようなものに変えて実施している。

アンケートは講義用と実験・実習用の2種類があり、その設問項目をそれぞれ表3-1、表3-2に示す。また、平成24年度のアンケート調査実施科目数と回答者数を表4に示す。

表3-1 授業改善に資するアンケート(講義)の設問項目

設問番号	設問項目(講義用)
Q1	この授業を選んだ動機は何ですか(この設問のみ複数回答可、次の選択肢から選ぶ) ・シラバスの内容 ・曜日や時間帯 ・必修科目だから ・専攻分野との関連性 ・友人先輩等の情報 ・その他
Q2	この授業を受講して、知識を広げ自己を高めることができましたか
Q3	シラバスから具体的な学習目標のイメージを描くことができましたか
Q4	学習目標を達成できましたか
Q5	授業の難易度は適切でしたか
Q6	授業中や授業時間外に発言や質問しやすいような配慮が感じられましたか
Q7	授業の構成や進め方は適切だと思いましたか
Q8	授業の内容は、学習意欲を起こさせるものでしたか
Q9	集中して授業に取り組みましたか
Q10	授業に関連した内容について自主的に学習しましたか
Q11	教員のアドバイス・サポートは学習に効果的でしたか
Q12	授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか
Q13	(教員自由設定欄)

表3-2 授業改善に資するアンケート(実験・実習)の設問項目

設問番号	設問項目(実験・実習用)
Q1	この授業を選んだ動機は何ですか(この設問のみ複数回答可、次の選択肢から選ぶ) ・シラバスの内容 ・曜日や時間帯 ・友人先輩等の情報 ・専攻分野との関連性 ・必修科目だから ・その他
Q2	この授業を受講して、知識を広げ自己を高めることができましたか
Q3	シラバスから具体的な学習目標のイメージを描くことができましたか
Q4	学習目標を達成できましたか
Q5	授業中や授業時間外に発言や質問しやすいような配慮が感じられましたか
Q6	授業の構成や進め方は適切だと思いましたか
Q7	授業の内容は、学習意欲を起こさせるものでしたか
Q8	集中して授業に取り組みましたか
Q9	授業に関連した内容について自主的に学習しましたか
Q10	この授業を受けたことにより、関連する講義で習ったことの理解が深まったと思いますか
Q11	教員のアドバイス・サポートは学習に効果的でしたか
Q12	授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか
Q13	(教員自由設定欄)

※設問番号にアンダーラインのある項目は、講義形式によって特有の設問項目である。  
調査は共通教育科目の受講生を対象としている。

表4 期末授業アンケート調査の回答数

		講義科目						講義科目計	実験・実習科目				計
		教養	情報	外国語	体育・健康(理論)	日本語・日本事情	基礎教育		教養(実験)	体育・健康(実習)	基礎教育(実験)	実験・実習科目計	
前期	回答科目数	102	23	154	8	6	59	352	-	32	13	45	397
	延べ回答者数	6,442	893	4,801	678	54	2,544	15,412	-	1,150	789	1,939	17,351
後期	回答科目数	83	6	125	8	6	37	265	2	25	11	38	303
	延べ回答者数	4,525	224	3,548	544	50	1,235	10,126	3	909	377	1,289	11,415

(2)アンケート結果の全体的な傾向

平成24年度に開講された共通教育科目のうち、表4に示すように前期397、後期303の授業で受講生の評価値が得られた。各授業の受講生の評価値を平均して、その授業の評価値とした。

前期及び後期に実施した授業評価アンケートの各質問項目の評価平均値を表5と表6に示す。

表5 前期授業評価アンケート各質問項目の評価平均値

		質問項目										
		Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12
講義科目	教養	3.34	2.99	3.00	3.12	2.99	3.21	3.13	3.11	2.72	Q11	3.26
	情報	3.26	2.90	3.05	2.94	3.03	3.06	2.94	3.13	2.74	3.08	3.11
	外国語	3.20	2.93	2.95	3.12	3.14	3.21	3.09	3.14	2.81	3.12	3.22
	体育・健康(理論)	3.21	2.87	2.98	3.15	2.95	3.14	2.96	2.95	2.54	3.19	3.09
	日本語・日本事情	3.51	3.49	3.56	3.58	3.58	3.57	3.39	3.42	3.32	3.01	3.51
	基礎教育	3.02	2.81	2.75	2.79	2.84	2.89	2.79	2.99	2.78	3.57	2.90
実験・実習科目	体育・健康(実習)	3.33	3.12	3.22	3.24	3.43	3.39	3.48	2.98	3.23	2.90	3.50
	基礎(実験)	3.34	2.93	3.22	3.12	3.18	3.18	3.43	2.82	3.20	3.41	3.31

3.26

表6 後期授業評価アンケート各質問項目の評価平均値

		質問項目										
		Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12
講義科目	教養	3.40	3.12	3.11	3.16	3.08	3.27	3.26	3.20	2.84	3.21	3.36
	情報	3.19	2.97	2.90	2.87	2.76	3.04	2.93	3.05	2.74	3.01	3.02
	外国語	3.26	3.02	3.01	3.17	3.20	3.26	3.17	3.20	2.89	3.22	3.29
	体育・健康(理論)	3.28	3.01	3.02	3.19	3.14	3.25	3.05	3.08	2.61	3.19	3.22
	日本語・日本事情	3.71	3.68	3.60	3.75	3.69	3.76	3.65	3.59	3.55	3.76	3.77
	基礎教育	3.12	2.99	2.87	2.90	3.04	3.09	2.94	3.03	2.91	3.03	3.06
実験・実習科目	体育・健康(実習)	3.40	3.21	3.33	3.36	3.50	3.49	3.52	3.06	3.34	3.47	3.51
	基礎(実験)	3.45	3.12	3.26	3.39	3.40	3.36	3.41	3.01	3.13	3.49	3.45
	教養(実験)	3.50	2.50	3.25	4.00	3.50	4.00	3.25	3.75	3.75	3.75	4.00

前期については、平成23年度後期から授業改善に資するアンケートに改定したため、平成23年度と比較することはできないが、平均した結果を図1-1及び図1-2に示す。図1-1は、学期末授業評価アンケート(講義用)の設問項目の評価について、クラスの平均値を表している。図に示した数字は回答者の延べ人数を表す。特に「講義、実験・実習共に授業に関連した内容について自主的に学習しましたか」(それぞれQ10およびQ9)で、その他の評価項目と比較して落ち込みが見られるので、自学自習の指導が必要と思われる。

後期については、講義形式の授業に対するアンケートでは、全ての平均評価値で前年度と比べ伸びがみられた。ただし、前期同様、Q10の授業に関連した内容について自主的に学習したかについては、その他の項目と比較して落ち込みが見られた。

自主的な学習の促進は大きな課題であり、落ち込みが見られる背景についても十分検討する必要がある。共通教育科目に関しては次年度のシラバスから予復習の方法や時間についても記載することになった。こうした流れも踏まえ、いかに学生の授業時間外の学習を促すかの検討も進める必要がある。

図1-1 前期末授業改善に資するアンケートの設問項目別評価の平均値(講義)

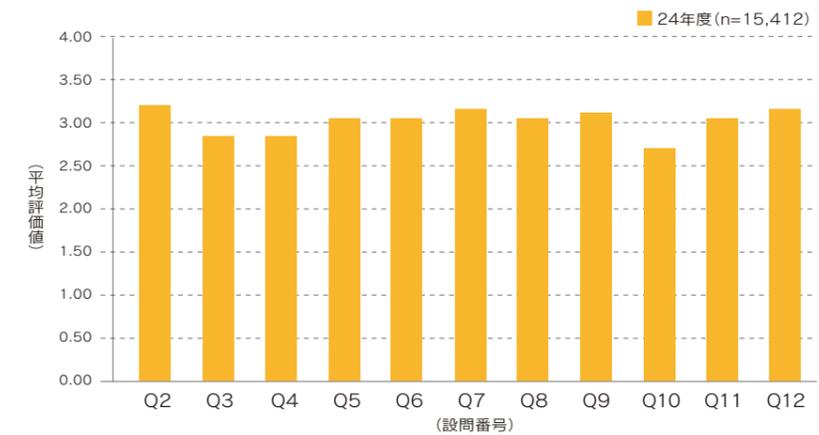


図1-2 前期末授業改善に資するアンケートの設問項目別評価の平均値(実験・実習)

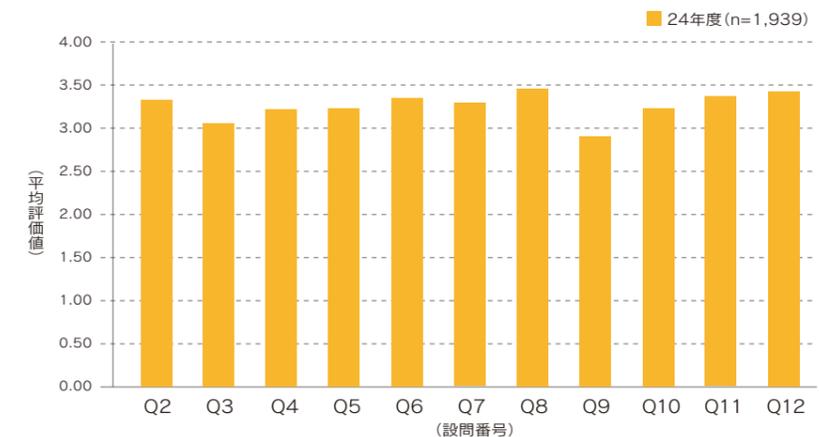


図2-1 後期末授業改善に資するアンケートの設問項目別評価の平均値(講義)

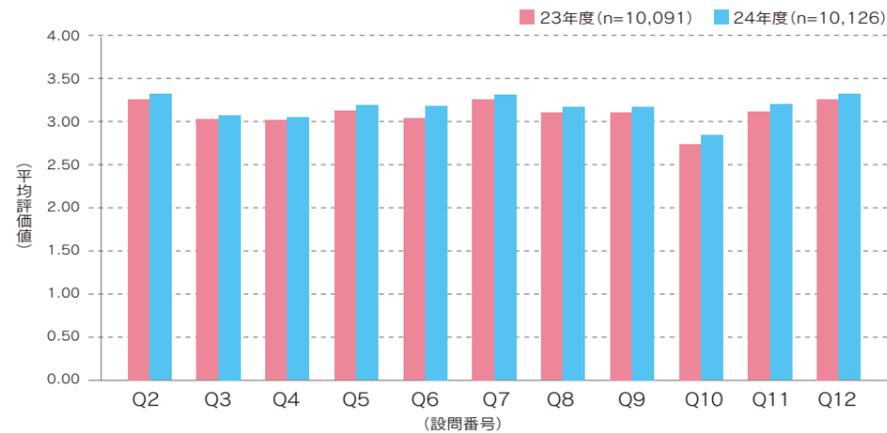
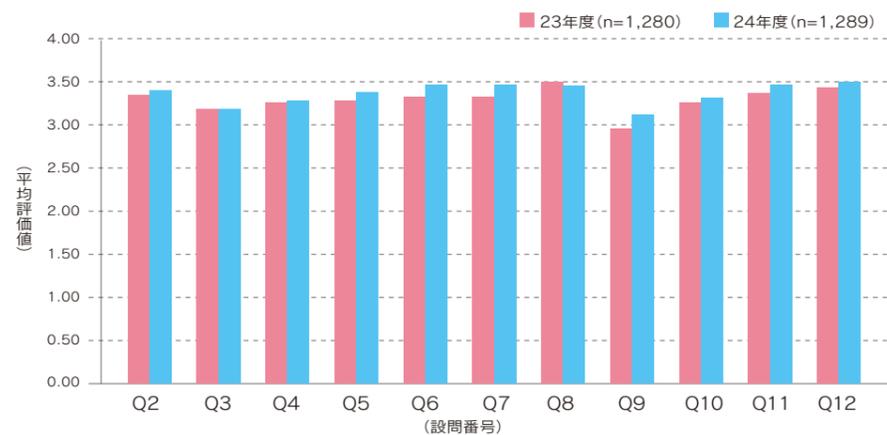


図2-2 後期末授業改善に資するアンケートの設問項目別評価の平均値(実験・実習)



### (3)平成24年度前期「授業改善に資するアンケート」結果の解釈と提言

ここでは、平成24年度前期に実施した「授業改善に資するアンケート」の集計結果をもとに、そこから読み取れる傾向と授業改善に役立つような事項を整理した。

#### 授業アンケートの変更点と評点の解釈

- アンケートの設問内容は前年度までとは異なるため、従来のアンケート結果との直接的な比較はできない。新アンケートの各設問の評点の経年的な比較は、来年度以降の数値の推移を見て行っていく必要がある。なお、同様の設問(学習目標の達成度、授業の満足度など)もあるので、前年度までのアンケート結果との関係を比べることは可能である。
- 評価方法は4段階評価で従来と変わらないが、選択肢は従来の「4そう思う、3どちらかといえばそう思う、2あまりそう思わない、1そう思わない」から、変更後は「4強くそう思う、3そう思う、2あまりそう思わない、1そう思わない」に変わっており、評点自体のもつ意味は従来のものとは異なる。

●上記の選択肢を考慮すると、評点が3あるいは、2点台後半もそれほど悪くない数字と見方もできる。概算で、例えば、評点2.9は「3」の選択者が9割で「2」の選択者が1割、評点2.8は「3」の選択者が8割で「2」の選択者が2割となるからである。ただし、評点を上げていく取組みは必要である。

●サンプルが質的に異なるものであることを考慮すべきであり、科目ごとの比較をすることには慎重になるべきである。

#### 全般的な傾向

- 「自主的な学習(講義設問Q10、実験・演習設問Q9)」の評点は、日本語・日本事情を除く全科目群において低い(平均2.78)。
- 「シラバスから具体的な学習目標をイメージできたか(Q3)」の評点も、日本語・日本事情を除く全科目群において、あまり高くない(平均2.94)。
- 実験・演習科目や実習科目の評点は、講義科目と比べて高い。
- 外国語の標準偏差は全項目にわたり高い。標準偏差は0.35~0.38である。
- 日本語・日本事情の評点は高いが、標準偏差も最大である。中でも「学習意欲(Q8)」、「自主的な学習(Q10)」は、標準偏差がそれぞれ0.51、0.54と高い値を示している。

#### 基礎教育科目の傾向

- 基礎教育に関して全ての質問項目において、全体平均よりも低いか同等である。学生の授業に関する評価が低だけでなく、学生の自己評価も低くなっている。
- 基礎教育科目でも実験は評点が高い。双方向性が良い結果(評点)に繋がっていると思われる。特に、「集中して取り組んだか(実験・演習設問Q8)」の評点が3.43と高い。
- 基礎教育科目の最低値は「学習目標の達成度(Q4)」、「学習意欲(Q8)」、「教員のサポート(Q11)」については最低値がいずれも2を下回っている。中でも、「学習目標の達成度(Q4)」の数値が低い。
- 基礎教育科目は他の科目群と比較した場合、平均値が全体的に低いわりに、標準偏差はそれほど変わらないため、基礎教育科目に対する学生からの評価が全体的に低いようである。

#### 教育改善に関する提言

- 「シラバスから具体的な学習目標をイメージできたか(Q3)」の評点から、日本語・日本事情を除く科目群でシラバスがあまり活用されていないことが危惧されるので、シラバスの活用を促す取組やシラバスの整備が望まれる。
- 日本語・日本事情では、「学習意欲(Q8)」、「自主的な学習(Q10)」に対する平均値はそれぞれ3.39、3.32と良好であるが、標準偏差がそれぞれ0.51、0.54と高い値を示しているため、一部の受講生の評価が非常に低いことが考えられ、何らかの対応を検討する必要がある。
- 基礎教育科目では「学習目標の達成度(Q4)」、「学習意欲(Q8)」、「教員のサポート(Q11)」で2.0を下回り、特に、「学習目標の達成度(Q4)」の数値が低いので、何らかの対応が必要である。
- 基礎教育科目はもとも受講する学生のレベルやモチベーションがバラバラであり、基礎教育科目に対する評価が低い問題を解決するためには、クラス分けの方法や教育内容等も含めた基礎教育科目のあり方に対する根本的な見直しの検討が必要である。

- 基礎教育科目に関しては、以下の「H23年度後期『授業改善メモ』のまとめ」にも記載されているように、担当者も苦慮されているが、教育の質を下げずに評点が上がるような工夫も必要と思われる。

「H23年度後期『授業改善メモ』のまとめ」のからの抜粋

※基礎教育科目の中には、高校での取得科目との関係などもあって、受講生間の基礎学力や理解力の差が大きく、授業のレベル設定に苦慮されているようです。授業レベルをどこに設定するかについては、授業担当者によって意見が分かれています。また、基礎教育科目は、学部の専門科目への橋渡しの役割があることを考えると、教育目標設定について学部関係者と授業担当者とのすり合わせも必要と思われる。

- 教養科目や外国語科目など開講数の多い科目群の場合、問題のある科目があっても見つけにくいので、数値として問題が顕在化している場合に限らず、担当者間での情報交換とそれに基づく教育内容や評価方法の統一化の検討が必要である。平成25年度以降のカリキュラム変更に伴い、科目群そのものが変わるため、科目群としての教育目標や主たる教育内容の統一化を目指す試みが求められている。

## 6. 授業改善メモ(報告書)

共通教育科目の授業担当者には、期末授業アンケートの結果を集計し、その結果を記入した結果シートを配付するとともに、集計結果を踏まえて、授業改善メモ(報告書)への記入を依頼している。前期はアンケート実施科目数397科目のうち授業改善メモの提出数は203で提出率は51.1%であった。そして、後期はアンケート実施科目数303科目のうち授業改善メモの提出数は174で提出率は57.4%であった。

授業改善メモでは、授業改善に資するアンケート設問項目のうち、Q4「学習目標を達成できましたか」、Q12「授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか」の2項目及び結果シートで特に気になった項目について、感想と今後の改善点について記入を求め、さらに、教育効果を上げるために現在実施している工夫や取り組みなど、その授業の特徴及び授業改善についての意見、提案について記入してもらっている。

本部会では上記の改善に加えて、授業改善メモに記載された教育改善のための有益なコメントや要望等を他の教員と共有することを目的に、教育センターホームページに取りまとめた内容を平成23年度前期分から公開しているので、積極的に活用していただくように要望する次第である。なお、工学部川畑委員による平成24年度前期「授業改善メモ」が、下記のようにまとめられている。

### 平成24年度前期「授業改善メモ」のまとめ(工学部 川畑委員)

高等教育研究開発部会では、共通教育科目等で開講される授業で受講者による「授業アンケート」を実施し、その結果を各担当教員にフィードバックしています。そして、「授業アンケート」の結果等に基づいて、各担当教員から「授業改善メモ」が提出されていますが、この授業改善メモには教育改善のための有益なコメントや要望等が多数含まれていますので、提出いただいた「授業改善メモ」の内容を取りまとめたものを平成23年度より公開しています。

以下に、平成24年度前期に開講された授業の「授業改善メモ」のまとめを、ご紹介いたします。

### 【授業改善に向けての試みや工夫】

いずれの科目群においても、以下に示すような、受講生の興味・関心を引き出す工夫や受講生の自主的な学習を促すための工夫を行うなどの取り組みが数多くなされています。前回と同様に受講生の理解度の確認あるいは向上を目的として、小テスト、小レポートなどを課している例も多く見られます。また、Moodleを活用して、レポート課題等に対する受講生への迅速なフィードバックが行われている例もあります。学生に発言・発表の機会を設けたり、グループワークやピア学習活動を行うなどの学生参加型授業を志向することにより、一方的な講義調の授業にしないように工夫している例も多く見られました。

基礎教育科目では、学生のレベルや知識不足に困っている現状が多くみられます。これに対する具体的な活動として、小テストやレポートの実施とその返却を行い、学生の理解度に合わせた指導努力が授業担当教員によってなされています。このような努力により、学生に積み上げながら勉強させることにつながっている場合が多いようです。科目担当教員によって何を教育目標にするかは、任されており、それぞれの考え方で実施されています。FD活動として、科目担当者が何を教えているのか、学部担当者と意見交換をする場を設定するのも一案であると思われる。その場合、学部において、各科目に求める授業の目標を明確にしておく必要があります。

### 授業改善に向けての試みや工夫の実施例

- [学生参加型授業]:ピアワーク、グループワーク、グループディスカッション、ピア学習活動、指名による発表や練習問題の板書、自発的挙手による発表、学生への練習問題解答の板書指名
- [学生の理解度や集中力を上げる工夫]:小テスト(授業開始時に前回復習小テスト、授業の終わりに理解度確認小テスト)、演習時間の確保、講義後に質問時間を設定、最低1人1回の指名、授業中に毎回5分一息つく時間の設定
- [学生の関心を引き出す資料の工夫]:動画・写真・音声(CD、DVD、テープ)などの視聴覚教材の活用、実物の提示、最新の新聞記事などの活用、書き込み式講義資料、穴埋め式講義資料
- [自主的な学習の啓発]:小テスト、小レポート、自習用プリント、Moodleを用いた自宅での学習の促進、グループ学習
- [受講生へのフィードバック]:小テストや小レポートの返却、解答例配布後の自己採点レポートの提出、質問等に対する回答
- [Moodleの活用]:小テスト・練習問題の詳しい解説の提供、質問等に対する回答、講義資料のアップロード、出席状況の学生への提示
- [学生の意見や質問等の収集手段]:電子メール、チャトルカード、出席カード、中間アンケート、質問票
- [語学力向上のための取り組み]:G-TELP式のリスニング、メトロノームを使った発音練習、フレーズリーディングの採用、ネーティブのTAによる協力

### 【授業改善に関連した意見・要望等】

授業および授業環境の改善に関連しましては、以下のような意見や要望をいただきました。これらは、既に教育センターで対応済みのものもありますが、共通教育科目の質的向上に活用できるように、所掌の各委員会と連携しながら議論していきたいと考えています。

## 授業改善全般に関する事項

- 授業参観も、参観者に授業全体の組立を理解してもらえようにしてもらえないか。
- 授業改善に努力している教員を表彰するような制度があったらよいと思う。授業改善は個人の努力まかせではなかなか前進しないと思う。
- 学生によるアンケートだけでなく、客観的な観点からその授業の評価するシステムは作れないものかと思う。本授業は莫大な労力を投入しているにも関わらず、学生からの評価はいつも低い。
- 「授業改善に資するアンケート」結果以外にもFDに関する具体的な資料を提供してほしい。高等教育研究開発部というFDの専属組織から、世界や日本の高等教育の動向ならびにIT技術の発達を背景に進展してきたFDの成果について、できる限り還元してもらえれば大変有り難い。
- 授業改善方法についての事例の提供や担当者同士の経験交流の場がほしい。
- 「板書を丁寧に」という要望が学生よりだされるが大学の講義における板書のあり方について議論をする場がほしい。
- 専門科目の講義に比べて基礎教育科目の講義の物理的・心理的負担が大きく、ストレスを感じる。→担当教員のサポートが必要。学部と共通教育の講義を同じ日程にできないか。
- 学生の基礎学力のばらつきが大きく、またかなり学力の低い学生が含まれている。にもかかわらず、この授業は必修であるので、教える側からすると大変苦勞が多い。
- 当該学部以外の教員の方に公開授業に参加してもらえ、大変貴重な意見をいただいた。特に共通教育科目では、学部間を越えた取り組みが重要であると思った。
- ホワイトボードより黒板の方がよい。インク切れ、色によって消しにくい場合がある。

## クラス編成に関する事項

- 本当は習熟度別にクラス編成ができればよいのだろうが、教室のキャパシティの問題や履修システム上の都合で、なかなかそこまで対応できていないのが現状である。
- 普通高校出身の学生と農業・水産・工業高校出身の学生のレベルの違いの大きさは大変なものである。こういう学生と一緒に授業するのは無理があるのではないか。
- 理想だが、20名程度の達成度に応じたクラス編成ができれば、学習効果がより期待できると思う。
- 高校の物理の履修と未履修の学生が混在しているので、クラスを分けるべきである。
- 事前にテストを実施して学力別のクラス編成を行い授業することが望ましい。
- 基礎学力がかなり低い学生に対しては、授業時間数が少なすぎるので、既に一部で実施されている週2時間の特別クラスを設けることが必要であると思う。
- 必修科目(基礎教育科目)で1クラス100余名は多過ぎる。
- 共通教育の性質上学生の数が多いのは仕方ない面もあるかもしれないが、250名を超えているのは少し多過ぎるよう感じられる。

## 授業アンケートに関する事項

- 授業改善メモは自身の授業を振り返り、次回の改善を考えるのに役立つ。
- 授業改善メモを作成しながら、次回の授業の改善に役立てている。
- 授業改善メモは良い。できれば同じ科目の別の担当者の授業を見学したい。
- 授業アンケートの結果の推移をみて、授業改善に反映させたい。
- 授業アンケート結果が数値とグラフで示されるので、よく理解できる。
- 授業アンケートの質問事項が今年からかなり改められ、具体的内容がよく読みとれるようになった。
- 評判がよい講義については、授業改善メモを免除していただきたい。
- 授業アンケートは学生に負担。これ以外に方法はないものか。
- 授業アンケートの取り組み目的を否定的には考えていないが、学生側から見たときはあまりにもアンケートが多くなっていないか。
- 授業アンケートの一律実施はやめたらどうか。役立つのは自由回答欄のみ。
- 授業時に外部の方が来てアンケートを回収されるようなシステムがあれば、教員に見られる心配が減り、割と正直な意見を書く可能性が高くなるかもしれない。
- それぞれの質問の回答の関連性(例えばQ5授業の難易度とQ10自主的な学習との関連性)がわかれば、より効果的な対応が可能となる。
- 授業アンケートの対象(学部や性)により反応が異なるため更なるデータ収集が必要である。

## 7. 「共通教育における学習実態調査・学習成果に関する調査2011」結果の検討

全学FD委員会により、「共通教育における学習実態調査・学習成果に関する調査2011」が2012年1～2月に2年次生(2010年度入学生)を対象として実施された。その結果を受け、教育センターとしての教育改善に向けた検討を行ったところ、下記のような意見が出された。

### ①「問5 共通教育科目等において受講した授業形態」：「役に立った」の中身

- ▶「とても役に立った」「少し役に立った」だけでは何が、何の役に立ったか分からない。そうした授業形態のどのような点が、自分のどのような部分で役に立ったと感じているかが明らかになるようにすべきではないか。

### ②「問6 共通教育において経験したこと」：授業での経験の学習動機に対する影響

- ▶ミニッツ・ペーパーを書くことや小テストを経験している学生は多い。しかし、特にミニッツ・ペーパーについては、学習動機の高まりにあまり寄与していない。授業の感想などをただ書かせるだけでなく、問題を解かせるなど学習への危機感を持たせるような形で行う必要があるのではないか。
- ▶事前あるいは事後の自宅学習が必要となるような課題を出すことも、同様に検討してはどうか。自宅で十分な学習が行われていなければ解けないような課題が課され、その結果が悪ければ不可が与えられるような科目が増え、単位が取りやすいとされる授業が減っていけば、共通教育科目の質的向上にもつながる。
- ▶レポートや答案へのコメント付きでの返却は学習動機の向上にもつながっており、積極的に行うべき。ただし、大人数の授業ではなんらかの工夫が必要。

## ③「問7 共通教育において入学時点と比べて変化したこと」：能力の変化への認識

- ▶「どちらともいえない」を選択肢にする意味はあるのか。問8のように、「少し伸びた」「あまり伸びなかった」といった項目にしたほうが良いのではないか。
- ▶伸びを実感している割合があまりにも低い。伸びを実感できるような工夫が必要（英語科目で行われているように、点数が何点上がったかなど）
- ▶特にBについては、教養科目のように多種多様な科目がひとくりにされており、聞き方に大きな問題があるのではないか。
- ▶「物事を数量的に分析して考える力」などは、基礎教育科目において伸びを自覚できた学生がもっと多くても良いのではないか。「～力」の意図するところを学生は十分に理解できているか。

質問方法の問題については、次回以降の調査においてFD委員会に検討を依頼するものである。また、②③については質問方法に関する内容のほか、具体的な教育改善に向けた指摘が含まれている。特に、ミニッツ・ペーパーの利用方法やレポート・答案の返却方法の検討については、実施している教員が多いことから改善に向けた情報提供を今後高等教育研究開発部会として行っていく必要があると思われる。また、授業時間外学習に関する提案については、2012年8月に示された中央教育審議会答申でも指摘されているように昨今の大学教育の喫緊の課題である。しかし、学生の自宅学習を促し、学習時間を増やすことは必要だが、全教員が同じ方法を一斉に行えば学生は過重な負担を抱えることになる。1週間に学生が受講する講義の種類がきわめて多い日本特有の事情を考慮したうえで、自宅学習をいかに促すかを検討する必要がある。

また、こうした具体的な質問に関する指摘以外にも、本調査の内容に関する学生へのフィードバックの仕方についても意見が出された。本調査は今回で2回目であるが、前回の結果が学生にどれだけフィードバックされたかについては不十分な面もあると思われる。教育改善への活用以外にも、学生への結果フィードバックと学生の学修改善への活用についても今後の検討課題である。

## 8. あとがき

平成24年度は、前年度企画を踏襲しつつ、さらなる改善を図った。特に、今年度から開始した授業改善メモのまとめは各授業担当者の授業改善に資するものであり、参考とされることを期待する。同時に、カリキュラムや関係各所の事業改善にも活用されることを願う。各企画への参加および各アンケートの回答、授業改善メモの作成等は、多くの教職員の協力を得て実現したものである。謝意を示すとともに、今後も引き続き協力を願いたい。

現在、組織的にも、また各授業担当者もアンケートなどを通じて様々なデータを収集している。しかし、これらのデータの活用についてはまだ改善の余地がある。今年度から作成を始めた授業改善メモのまとめはその第一歩ともいえる。今後は、収集したデータをどのような形で公開し、活用していくか、また、データ同士の有機的な連携をどう図るかといったことが大きな課題である。

また、平成25年度からは共通教育カリキュラムが改訂される。新カリキュラムが学生の能力育成に寄与するものとなるよう、問題点の検証や改善への提案を行っていく必要がある。同時に、カリキュラムをより良いものとしていくためにも、各授業担当者の資質向上を目的とした企画の立案・実行が求められている。

最後に、全ての企画を行うに当たり、各学部委員及び教育センター教育推進係職員の多大なる支援があったことを記しておきたい。

(文責 教育センター 伊藤 奈賀子)

## 高等教育研究開発部会委員名簿

高等教育研究開発部長	西 隆一郎
教育センター 高等教育研究開発部	渋井 進、伊藤 奈賀子
法文学部	鳥飼 貴司
教育学部	小柳 正司
理学部	小山 佳一
医学部	丹羽 さよ子
歯学部	於保 孝彦
工学部	川畑 秋馬
農学部	枚田 邦宏
水産学部	小谷 知也
共同獣医学部	三好 宣彰

II

鹿児島大学  
の  
FD活動

第2部

各学部・研究所の  
FD活動報告